

御供田遺跡5

御 供 田 遺 跡 5

～第3・4・6次調査～

大野城市文化財調査報告書 第190集



大野城市文化財調査報告書
第190集

大野城市教育委員会

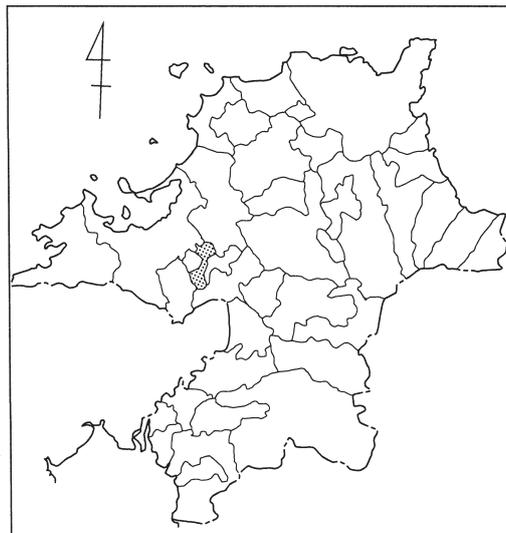
2021

大野城市教育委員会

御^ご供^く田^{でん}遺跡 5

～第3・4・6次調査～

大野城市文化財調査報告書 第190集



2021

大野城市教育委員会

序

大野城市は福岡平野の一角にあたり、北側に大城山、南側に脊振山系が広がる縦長の市域を有しており、その形はよくヒョウタンに例えられます。

今回報告する御供田遺跡はJ R大野城駅の周辺にあり、大野城市だけでなく、春日市にも広がる遺跡です。これまでの調査では、弥生時代の集落や古墳、奈良時代の寺跡などが見つかри、古代の人々の活発な生活が明らかになっています。

本書で報告する第3・4・6次調査は、マンション建設を契機に調査が行われたものです。調査では平安時代から鎌倉時代の集落が見つかリ、中世の白木原村の跡と考えられます。また、発掘調査で出土した遺物の中には、第二次世界大戦後に現在のJ R大野城駅西側に駐留した米軍板付基地に関連するものも見つかりました。

御供田遺跡のあるJ R大野城駅から西鉄白木原駅周辺は、米兵相手の店が並び、米軍ハウスと呼ばれる米兵向けの住宅も建設されるなど、米軍基地とともに街が発展してきました。こうした時代の遺物が発掘調査で出土したことは、戦後の大野城市の歴史を明らかにする上で大変重要な成果となります。

こうした成果が、大野城市の歴史をさらに厚みのあるものとし、本報告がその端緒となることを期待しています。

最後になりましたが、事業者をはじめ地元の方々にご協力とご理解をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

令和3年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 吉富 修

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が共同住宅建設にともなって発掘調査を実施した、大野城市白木原1丁目312-2、312-1、309-1～5、310-1・2・4～7所在の御供田遺跡第3・4・6次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、西日本鉄道株式会社・ロワール白木原ネクストクラスの委託を受け、大野城市教育委員会が実施した。
3. 整理作業は、大野城市教育委員会の単費事業として実施した。
4. 本書における遺構の分類番号は、SA：柵・土塁・堀、SB：掘建柱建物、SC：竪穴住居跡、SD：溝、SE：井戸、SF：道路状遺構、SH：広場、SJ：甕棺墓、SK：土坑、SP：ピット、SR：祭祀遺構、ST：古墳・木棺墓・土坑墓・石棺墓、SX：性格不明遺構とした。
5. 発掘調査は、3・4次調査を石木秀啓・丸尾博恵、6次調査を早瀬賢が担当し、整理作業は石木が担当した。
6. 遺構写真は、石木・丸尾・早瀬が撮影した。
7. 遺物写真は、写測エンジニアリング株式会社（牛嶋茂）が撮影し、一部石木が撮影した。
8. 第6次発掘調査に係る遺構図面の作成は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムが行い、その他は大野城市教育委員会が行った。
9. 遺構実測図の方位は座標北を表し、座標は国土座標（第Ⅱ系）を使用した。
10. 遺物実測図は、小畑貴子・古賀栄子・小嶋のり子・篠田千恵子・白井典子・津田りえ・仲村美幸・氷室優・松本友里江が作成した。
11. 製図は、小畑・篠田が作成した。
12. 拓本は、古賀・小嶋が作成した。
13. 観察表は、小嶋が作成した。
14. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図『福岡南部』を使用した。
15. 本書の遺物・実測図・写真はすべて大野城市教育委員会が管理・保管している。
16. 本書の執筆並びに編集は石木が行った。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査体制	1
II. 位置と環境	2～6
III. 調査の結果	7
1. 第3次調査	
(1) 調査概要	7
(2) 遺構と遺物	7～19
(3) 小結	19
2. 第4次調査	
(1) 調査概要	20
(2) 遺構と遺物	20～35
(3) 小結	35
3. 第6次調査	
(1) 調査概要	36
(2) 遺構と遺物	36～44
(3) 小結	44
IV. まとめ	51
1. 古代～近世にかけての土地利用について	51
2. 米軍板付基地に係わる遺物について	51～52

図版目次

図版1	(1) 御供田遺跡第3次調査地全景 (南東から)
	(2) 御供田遺跡第3次調査地全景 (上空から)
図版2	(1) 第3次SD03 (東から)
	(2) 第3次SX02 (東から)
	(3) 第3次SX05 (上から)
図版3	(1) 御供田遺跡第4次調査地北半部全景① (南東から)
	(2) 御供田遺跡第4次調査地北半部全景② (南東から)
図版4	(1) 御供田遺跡第4次調査地南半部全景① (南東から)
	(2) 御供田遺跡第4次調査地南半部全景② (南東から)
図版5	(1) 御供田遺跡第4次調査地中央部全景① (南東から)
	(2) 御供田遺跡第4次調査地中央部全景② (南東から)
図版6	(1) 第4次SD01全景 (西から)

- (2) 第4次 SD01a 土層 (南西から)
- (3) 第4次 SD01d 土層 (南西から)
- 図版7 (1) 第4次 SD06土層 (南西から)
- (2) 第4次 SD06①土層 (南西から)
- (3) 第4次 SD08全景 (西から)
- (4) 第4次 SD09全景 (北西から)
- (5) 第4次 SD10全景 (南東から)
- (6) 第4次 SD10①土層 (南西から)
- (7) 第4次 SD10②土層 (南西から)
- (8) 第4次 SD10③土層 (南西から)
- 図版8 (1) 第4次 SD15全景 (北西から)
- (2) 第4次 SD15土層 (北西から)
- (3) 第4次 SD16土層 (南西から)
- (4) 第4次 SD17全景 (南東から)
- (5) 第4次 SD17-1・2区間土層 (南東から)
- (6) 第4次 SD17-2・3区間土層 (南東から)
- (7) 第4次 SD17-3・4区間土層 (北西から)
- (8) 第4次 SD17-7・8区間土層 (南西から)
- 図版9 (1) 第4次 SD18-2・3区間土層 (北東から)
- (2) 第4次 SD18-3・4区間土層 (北東から)
- (3) 第4次 SD18-4・5区間土層 (北東から)
- (4) 第4次 SD18-5・6区間土層 (北東から)
- (5) 第4次 SD18-6・7区間土層 (北東から)
- (6) 第4次 SD18-7・8区間土層 (北東から)
- (7) 第4次 SD19・24土層 (南東から)
- (8) 第4次 SD19・22土層 (南東から)
- 図版10 (1) 第4次 SP09遺物埋納状況 (南西から)
- (2) 第4次 SP09遺物検出状況 (南西から)
- (3) 第4次 SP09検出状況 (南東から)
- 図版11 (1) 第4次 SX01全景 (南西から)
- (2) 第4次 SX01土層 (南西から)
- 図版12 (1) 御供田遺跡第6次調査地調査前全景 (北から)
- (2) 御供田遺跡第6次調査地東半部全景 (上空から)
- 図版13 (1) 御供田遺跡第6次調査地西半部全景① (南東から)
- (2) 御供田遺跡第6次調査地西半部全景② (北東から)
- 図版14 (1) 第6次 SD01全景 (南東から)
- (2) 第6次 SD04・05東半部全景 (南西から)
- (3) 第6次 SD07~10東半部全景 (南西から)
- 図版15 (1) 第6次 SD10・11西半部全景 (北東から)

(2) 第6次 SP376遺物出土状況 (南東から)

(3) 第6次 SX02検出状況 (北西から)

図版16 第3次調査出土遺物①

図版17 第3次調査出土遺物②

図版18 第3次調査出土遺物③

図版19 第3次調査出土遺物④

図版20 第3次調査出土遺物⑤ 第4次調査出土遺物①

図版21 第4次調査出土遺物② 第6次調査出土遺物

図版22 現在の御供田遺跡第3・4次調査地 (左側マンションが第3次、中央マンションが第4次調査地)

挿 図 目 次

第1図	御供田遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
第2図	調査地位置図 (1/5,000)	6
第3図	御供田遺跡第3次調査 SD03土層実測図 (S=1/40)	8
第4図	御供田遺跡第3次調査遺構配置図 (S=1/200)	9~10
第5図	御供田遺跡第3次調査 SD02・03出土遺物実測図 (S=1/3)	11
第6図	御供田遺跡第3次調査 SP、SX 出土遺物実測図 (S=1/3)	12
第7図	御供田遺跡第3次調査 SX02・04・06実測図 (S=1/40)	13
第8図	御供田遺跡第3次調査 SX05実測図 (S=1/30)	14
第9図	御供田遺跡第3次調査 SX07、SE01実測図 (S=1/40)	15
第10図	御供田遺跡第3次調査 SE01出土遺物実測図① (S=1/3)	16
第11図	御供田遺跡第3次調査 SE01出土遺物実測図② (S=1/3)	17
第12図	御供田遺跡第3次調査カクラン等出土遺物実測図 (S=1/3)	18
第13図	御供田遺跡第4次調査遺構配置図 (S=1/200)	21~22
第14図	御供田遺跡第4次調査 SD 土層実測位置図 (S=1/200)	23
第15図	御供田遺跡第4次調査 SD01~06土層実測図 (S=1/40)	24
第16図	御供田遺跡第4次調査 SD04・07~09出土遺物実測図 (S=1/3)	25
第17図	御供田遺跡第4次調査 SD17土層実測図 (S=1/40)	26
第18図	御供田遺跡第4次調査 SD18・19・21・22・24土層実測図 (S=1/40)	27
第19図	御供田遺跡第4次調査 SD10・12・13・15出土遺物実測図 (S=1/3)	28
第20図	御供田遺跡第4次調査 SD17出土遺物実測図 (S=1/3)	29
第21図	御供田遺跡第4次調査 SD18・19、SP、SX、カクラン、検出面出土遺物実測図 (119は S=1/2、他は S=1/3)	30
第22図	御供田遺跡第4次調査 SP・SX 実測図 (S=1/20、S=1/40)	33
第23図	御供田遺跡第6次調査遺構配置図 (S=1/200)	37~38
第24図	御供田遺跡第6次調査 SD 土層実測図 (S=1/40)	40

第25図	御供田遺跡第6次調査出土遺物実測図（123・134・142は S=1/2、他は S=1/3）	41
第26図	御供田遺跡第6次調査 SP376実測図（S=1/20）	43
第27図	御供田遺跡第6次調査 SX02実測図（S=1/40）	43
第28図	御供田遺跡第1～6次調査遺構配置図（S=1/1,500）	52

表 目 次

第1表	第3次調査出土遺物観察表①	45
第2表	第3次調査出土遺物観察表②	46
第3表	第4次調査出土遺物観察表①	47
第4表	第4次調査出土遺物観察表②	48
第5表	第4次調査出土遺物観察表③	49
第6表	第6次調査出土遺物観察表	50

I. はじめに

1. 調査にいたる経緯

御供田遺跡は、春日市内で実施された春日御供田区画整理事業に伴う文化財調査の際に、福岡県教育委員会が発掘調査を実施し、その存在が知られるようになった遺跡である。遺跡の名称は、春日市の小字名御供田からとられている。大野城市の御供田遺跡の範囲内の小字は後田・道場などであるが、平成2年（1990）に実施した第1次調査の際に、福岡県教育委員会が実施した御供田遺跡調査地と同一遺跡としたことから一連の遺跡名とした経緯がある。

今回報告を行うのは、平成10・11・18年度に実施した第3・4・6次調査の成果についてである。いずれも共同住宅の建設に伴って実施された。各調査における調査に至る経緯は下表のとおりである。

調査回数	調査地	調査面積	調査期間	調査原因者
第3次調査	白木原1丁目312-2	2656.27㎡のうち 1393.66㎡	平成10年7月13日 ～9月1日	西日本鉄道 株式会社
第4次調査	白木原1丁目312-1	2207.94㎡	平成11年4月5日 ～8月10日	西日本鉄道 株式会社
第6次調査	白木原1丁目309-1～5、 310-1・2・4～7	1600㎡	平成18年12月13日 ～平成19年3月15日	ロワール白木原 ネクストクラス

2. 調査体制

各調査については既に10年以上が経過していることから、本報告書作成時の令和2年度の大野城市教育委員会の整理作業体制のみ記す。

教育長	吉富 修
教育部長	日野和弘
ふるさと文化財課長	石木秀啓（整理担当）
発掘調査担当係長	上田龍児
技師	齋藤明日香、山元瞭平
会計年度任用職員	木原 堯、澤田康夫
啓発・整備担当係長	林 潤也
主査	徳本洋一
主任主事	秋穂敏明
主事	鮫島由佳
会計年度任用職員	深町美佳、山村智子、三好りさ、西村友美

〔埋蔵文化財発掘調査整理作業員〕

小畑貴子・古賀栄子・小嶋のり子・篠田千恵子・白井典子・津田りえ・仲村美幸・氷室優
松本友里江

Ⅱ．位置と環境

福岡県大野城市は、福岡県西部にあり、市域は南北に長く、よくヒョウタンの形に例えられる。福岡平野の奥部に位置し、東部は特別史跡大野城跡が所在する四王寺山や乙金山、北部は三郡山からのびる井野山・月隈丘陵、南部は脊振山・牛頸山からのびる丘陵が続く。中央は平野部にあたり、国道3号線や九州自動車道、西鉄天神大牟田線・鹿児島本線など、主要な交通路が通る。

御供田遺跡は、市のほぼ中央部にあたり、牛頸山から北に派生する丘陵先端部から平野部に位置する。御供田遺跡の位置する福岡平野周辺は東アジアとの交流の窓口として、半島をはじめ古代より各地域の文化の往来が活発な地域である。御供田遺跡の歴史的環境を明らかにするため、市内の遺跡を中心に、周辺遺跡の歴史的環境を述べていくことにしたい。

旧石器時代

大野城市内では、釜蓋原遺跡・雉子ヶ尾遺跡・松葉園遺跡・出口遺跡・横峰遺跡において遺物の出土が確認されており、北部の乙金山・大城山や南部の牛頸山からのびる丘陵地帯を生活の舞台としていたことが知られる。

縄文時代

縄文時代においても、遺跡立地は旧石器時代と同じような様相を示し、南北の丘陵地帯に多くの遺跡が形成される一方、石勺遺跡や原ノ口遺跡でも押型文土器などが出土しており、早期より平野部の微高地上に活動が認められ、活動の範囲が徐々に広がっていく。

弥生時代

福岡平野の弥生時代を代表する遺跡といえば、板付遺跡が挙げられる。板付遺跡は、弥生時代早期には集落の出現が認められ、前期には台地上に環濠集落が営まれるようになり、後期初頭にかけ福岡平野の拠点集落として機能している。墓地としては、三郡山地から西へ下る丘陵上に御陵前ノ椽遺跡、塚口遺跡、中・寺尾遺跡、金隈遺跡などが営まれており、脊振山地から北へ派生する春日丘陵上には伯玄社遺跡が営まれる。

中期に入ると、春日丘陵上に多数の集落と墳墓が営まれるようになる。特に甕棺墓を中心とする墳墓群は著しい増加を見せるが、中でも特筆されるのは中期後半に位置付けられる須玖岡本遺跡であり、奴国王墓と考えられる。本堂遺跡では、中期後半から末頃の竪穴住居跡などが確認されたが集落の在り方としては小規模・短期的なものであり、墳墓も梅頭遺跡3次調査で甕棺墓が1基確認されたのみで大規模な造墓は認められない。

後期に入っても須玖岡本遺跡群ではなお盛んに青銅器生産がおこなわれており、比恵・那珂遺跡群では首長居館に類する環溝の存在から、規模が拡大する様子が明らかである。駿河遺跡では竪穴住居跡が確認され、鉄器や青銅製鋤先などが出土しており、拠点的な集落と考えられるが、牛頸川の南側から大宰府にかけての地域は集落が存在するが小規模なものである。

古墳時代

古墳時代に入ると、福岡平野周辺にはたくさんの古墳が造られるようになる。那珂八幡古墳・原



第1図 御供田遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | | | |
|-------------|-------------|--------------|-----------------|-------------|----------------|
| 大野城市 | 16. 国分田遺跡 | 32. 華無尾遺跡群 | 44. 駿河D遺跡 | 58. 向谷古墳群 | 太宰府市 |
| 1. 御供田遺跡 | 17. 後原遺跡 | 33. 屏風田遺跡 | 45. 駿河E遺跡 | 59. 春日平田北遺跡 | 73. 島本遺跡 |
| 2. 古賀遺跡 | 18. 原ノ畑遺跡 | 34. 日ノ浦遺跡群 | 46. 原ノ口遺跡 | 60. 春日平田遺跡 | 74. 神ノ前竊跡群 |
| 3. 御笠の森遺跡 | 19. 金山遺跡 | 35. 塚原遺跡群 | 47. 立石遺跡 | 61. 大牟田竊跡 | 75. 原口遺跡 |
| 4. 宝松遺跡 | 20. 釜蓋原古墳群 | 36. 畑ヶ坂遺跡群 | 48. 先ノ原B遺跡 | 62. 惣利竊跡群 | 76. 久郎利遺跡 |
| 5. 村下遺跡 | 21. 笹原古墳 | 37. 上大利小水城跡 | 49. 先ノ原・春日公園内遺跡 | 63. 惣利遺跡 | 77. 日焼遺跡群・竊跡群 |
| 6. 雑餉隈遺跡 | 22. ハザノ遺跡 | | 50. 伯玄社遺跡 | 64. 惣利北遺跡 | 78. 宮ノ本遺跡群・竊跡群 |
| 7. 中・寺尾遺跡 | 23. 梅頭遺跡群 | 福岡市 | 51. 大南遺跡 | 65. 惣利西遺跡 | |
| 8. 薬師の森遺跡 | 24. 本堂遺跡群 | 38. 麦野C遺跡 | 52. 大谷遺跡 | 66. 惣利東遺跡 | |
| 9. 原口古墳群 | 25. 上園遺跡 | 39. 南八幡遺跡群 | 53. 九州大学筑紫地区遺跡群 | 67. 大土居水城跡 | |
| 10. 銀山遺跡 | 26. 出口竊跡・遺跡 | 40. 雑餉隈遺跡群 | 54. 向谷遺跡 | 68. 円入遺跡 | |
| 11. 雉子ヶ尾遺跡 | 27. 谷川遺跡 | 春日市 | 55. 向谷北遺跡 | 69. 春日平田遺跡群 | |
| 12. 雉子ヶ尾古墳群 | 28. 水城跡 | 41. 上平田・天田遺跡 | 56. 向谷西遺跡 | 70. 春日平田西遺跡 | |
| 13. 原門遺跡 | 29. 野添遺跡群 | 42. 駿河A遺跡 | 57. 向谷南遺跡 | 71. 塚原古墳群 | |
| 14. 石勺遺跡 | 30. 大浦竊跡群 | 43. 駿河B遺跡 | | 72. 浦ノ原竊跡群 | |
| 15. 瑞穂遺跡 | 31. 平田竊跡群 | | | | |

口古墳といった大型前方後円墳のほか、福岡平野の南北の丘陵上には小規模な円墳・方墳などがまとまって営まれる。御陵古墳群・宮ノ本古墳群・炭焼古墳群では前期からの墳墓群が認められ、該期の古墳群が拠点的に分布していることが分かる。

集落では、比恵・那珂遺跡群では外来系土器の搬入が多く認められ、一大交易センターであったとの位置付けがされている。一方、やや内陸に入った瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡、本堂遺跡、殿城戸遺跡でも集落遺跡が確認されるが、大規模なものではない。

5世紀代になると、老司古墳で初めて横穴式石室が築かれる。野藤1号墳・貝徳寺古墳などの那珂川中流域における前方後円墳の築造が活発なのに対し、御笠川流域では笹原古墳・成屋形古墳・古野古墳群が築かれるが、帆立貝式前方後円墳・円墳を中心としており、明らかな格差が見られる。塚原古墳群は牛頸川流域に位置し、5世紀後半から造墓を開始しており、新たな群集墳が営まれる。集落は比恵・那珂遺跡群が停滞する様相を見せており、立花寺B遺跡では5世紀後半にはじまる大規模な集落が確認される。また、上園遺跡や中・寺尾遺跡・金山遺跡などでは小規模な集落が営まれる。

6世紀代になると、継体天皇21年（527）に北部九州を舞台とする磐井の乱という大事件が起こり、北部九州の支配体制に大きな変化が認められる。こうした変化は遺跡の推移にも現れており、先述した牛頸塚原古墳群やカクチガ浦古墳群など5世紀代に造墓を開始した群のうち、6世紀前半から中頃を境にして造墓を停止する群がある。後半になると、福岡平野南北の丘陵上には小古墳が爆発的に築造されるようになる。群の中には、観音山古墳群中原I-1号墳のように全長30m以下の前方後円墳を含むものもある。また、善一田古墳群では直径26mの円墳を群内に含み、新たな地域首長の発生を認めることができる。牛頸窯跡群周辺では、牛頸中通古墳群・後田古墳群・小田浦古墳群は須恵器工人の古墳群とされる一方、梅頭遺跡群では窯を墳墓に転用した事例が知られており、須恵器工人の多様な墓制の在り方が認められる。また、6世紀中頃に操業を開始する牛頸窯跡群は次第に規模を拡大し、その製品は福岡平野周辺一帯に供給されている。集落では、比恵・那珂遺跡群は6世紀後半以降規模を拡大し、那津官家があった可能性が指摘されている。薬師の森遺跡や牛頸塚原遺跡においても集落の拡大が見られ、鉄器生産や須恵器生産の拡大と関わりがある。

飛鳥時代～奈良時代

7世紀前半代は、前代に築造された古墳への追葬や新規の古墳築造が認められるが、この様相が一変したのは664年から665年におこなわれた水城・大野城の築造を契機とする。この時期に比恵・那珂遺跡群にあった那津官家は現在の太宰府市に機能が移り、大宰府政庁が成立すると考えられる。上大利・春日・大土居・天神山には小谷を塞ぐように小水城が築かれ、大野城・水城とともに大宰府を囲む羅城として機能している。

大宰府は西海道を統括する地方最大の役所である。7世紀後半は政庁Ⅰ期段階にあたり、大宝律令施行以後の政庁Ⅱ期（8世紀前半以降）段階には条坊の整備も進み「天下之一都会」と謳われる。大宰府政庁・条坊の整備とともに官道の整備も進められ、谷川遺跡や春日公園内遺跡では水城西門ルート、板付遺跡や高畑遺跡などでは東門ルートが確認されている。官道沿いには新たな集落や官衙遺構の展開が認められ、高畑遺跡では木簡・「寺」銘墨書土器・瓦などの出土遺物や伝承から高

畑廃寺あるいは那珂郡衙の可能性が指摘されている。また、井尻B遺跡では井尻廃寺の想定がなされ、麦野遺跡群・南八幡遺跡群・雑餉隈遺跡群では8世紀の大規模な集落が認められ、水城からのびる東西ルートの官道間の狭い地域に広がる集落遺跡の性格について解明が望まれる。牛頸窯跡群は8世紀前半には和銅六年銘ヘラ書き須恵器より、調納物としての貢納があったことが判明した。その製品は肥前・豊前・肥後国など北部九州各国にもたらされることが胎土分析の結果より判明し、西海道下随一の窯業地帯として盛んに煙を上げている。

平安時代～戦国時代

前代に隆盛を極めた大宰府も、9世紀に入ると遺構・遺物量が激減しており、停滞する様相を見せている。こうした状況は周辺集落にも表れており、麦野遺跡群等に見られた大規模な集落は姿を消す。また、西海道最大の須恵器生産地であった牛頸窯跡群も、9世紀に入ると生産量が減少し、9世紀中頃には操業に肥後地域の工人の参画が想定できるなど、生産が衰退・終了へむかっている。薬師の森遺跡や天神田遺跡、谷川遺跡や上大利小水城周辺遺跡では、瓦器焼成遺構や棒状土製品が多量に見つかっており、瓦器生産が盛んに行われている。

平安時代も後半になると律令体制は崩壊し、武士が活躍する時代を迎える。大宰府政庁・鴻臚館の機能は中世都市「博多」に移る。本堂遺跡では、谷部から10・11世紀代の遺物が大量に出土しており、本堂寺があり、大利村が近くにあったものと考えられる。後原遺跡・御供田遺跡でもこの時期に集落が出現しており、白木原村の萌芽と考えられる。御笠の森遺跡は御笠川西岸に広がる遺跡であり、区画溝を有する屋敷跡が確認される大規模な集落である。隣接する宝松遺跡も区画溝を巡らす集落が確認されており、両遺跡は江戸時代前期に日田街道沿いへ移転する前の山田村の跡と考えられる。出土遺物としては茶臼や羽子板などが出土しており富裕層が居住していたことがうかがえ、『筑前国続風土記拾遺』からも周辺の筒井村・中村を含む大きな村であったことが分かる。

江戸時代以降

江戸時代になると、明治22年に成立する大野村につながる村々が成立する。後原遺跡は御供田遺跡に隣接しており、主に江戸時代後期の集落・墳墓が確認されている。近世の白木原村本村と考えられる。また、日田街道沿いには雑餉隈遺跡があり NVOC 銘の入った肥前産磁器が出土することから、雑餉隈町にあたり、街道を行き交う人や物の動きを示している。

御供田遺跡周辺の状況について明治時代の地図を見ると、丘陵のほか水田として利用されていることが分かる。太平洋戦争後、アメリカ軍の進駐により JR 大野城駅西側の丘陵地から牛頸川周辺の地域に米軍板付基地春日原住宅地区が作られる。また、周辺の春日原・白木原地区には米軍ハウスが作られ、軍関係者が街に暮らす時代があった。御供田遺跡の発掘調査により、カクランから米軍関連の遺物が出土することは、こうしたことによるものであろう。現在も米軍基地の名残は街のあちこちに残っており、大野城市の街の風景の一部となっている。



第2図 調査地位置図 (1/5,000)

Ⅲ. 調査の結果

1. 第3次調査

(1) 調査概要

御供田遺跡第3次調査地は、大野城市白木原1丁目312-2に所在する。共同住宅の建設が計画され、事業面積2656.27㎡のうち、建築工事が行われる1393.66㎡について発掘調査を実施した。それ以外の部分は遺構に影響がないと判断され、地下に保存されている。

発掘調査地は、脊振山系から北に続く丘陵地が平野部になる所に位置する。現在は、JR鹿児島本線沿線にあたり、JR大野城駅のすぐ北側に位置する。調査は、平成10年7月13日～9月1日の間に実施した。調査の結果、当時の地表下およそ1m程度で遺構面が検出され、溝・土坑・ピット・カクランが確認された。溝はいずれも北東から南西方向にのび、平行しているが断続的であった。土坑・ピットは散在しており、特にピットは掘立柱建物を構成するようなものではなかった。また、調査地内の各所には、カクランが多数確認できた。カクランからは、近現代の陶磁器をはじめガラス瓶などが出土したほか小銃弾も出土し、本遺跡の大きな特徴となった。

(2) 遺構と遺物

A. 溝

SD01 (第4図)

調査区の南側に位置し、南西から北東方向にはほぼ直線的にのびる。幅0.32～0.59m、検出面からの深さは2～9cmで北東端が最も深くなる。埋土は白色粘質土～明褐灰色砂質土であり、流滞水があったものと考えられるが、性格はよく分からない。出土遺物は土師器小片があるが、器種・時期ともに不明であり図化できなかった。

SD02 (第4図)

調査区の西側に位置し、SD01・03とほぼ同じ南西から北東方向にのびる。調査区内で終わっており、長さ約7.3m、最大幅0.73mで北東側は細くすぼまる。検出面からの深さは2～9cmで、溝底はほぼ同じ高さである。北東端が最も深くなる。埋土は褐灰色土で一部浅黄橙色土を含み、しまりあり固い。SD03との距離は溝中心間で約4mと平行にのびるが、掘り方および深さがまったく異なることから、一連のものとは考えにくい。出土遺物は、土師器があるがいずれも小片であった。

出土遺物 (第5図)

土師器

椀(1) 高台部の小片である。体部は失われており全形は分からない。高台は低く外方に開く。

SD03 (第3図、図版2)

調査区の西側に位置し、SD02に平行する。概ね南西から北東方向に約15mのび、北東側は調査区外にのび、南西側は緩く西へ曲がる。幅は0.52～1.09m、検出面からの深さは15～44cmで南西か

ら北東側へ向かって緩く下る。掘り方はほぼ台形に近く、埋土は褐色～暗褐色などで、しまりあり固い。平面形態と深さから見て、南西側から始まり北東へ流水するものと考えられるが、性格についてはよく分からない。出土遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・瓦・土製品がある。

出土遺物 (第5図)

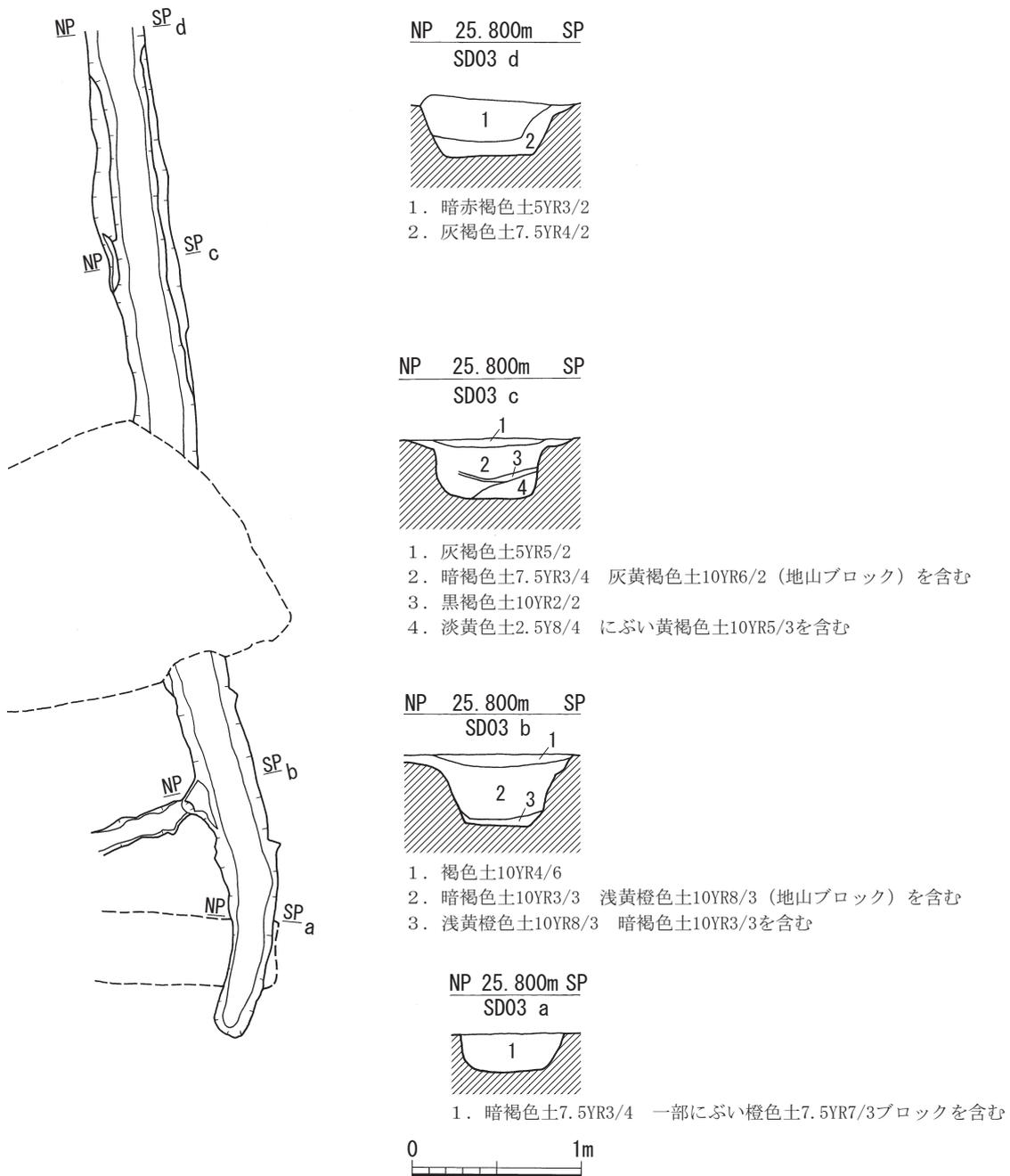
須恵器

杯 (2) 平底であり、杯の可能性を考えた。底部外面はナデ、内面はロクロ回転ナデが残る。

土師器

杯 (3) 小片のため、反転復元に難がある。底部外面糸切り、黒斑を有する。

椀 (4) 小片のため、傾きに難がある。外面に被熱痕を有する。



第3図 御供田遺跡第3次調査 SD03土層実測図 (S=1/40)



第4図 御供田遺跡第3次調査遺構配置図 (S=1/200)

甕 (5・6) 5は口縁部片。体部内面はヘラ削り。内外面に煤が付着する。6は底部片。器壁は厚く、平底で体部は丸く大きく張るようである。弥生土器の可能性もある。

黒色土器

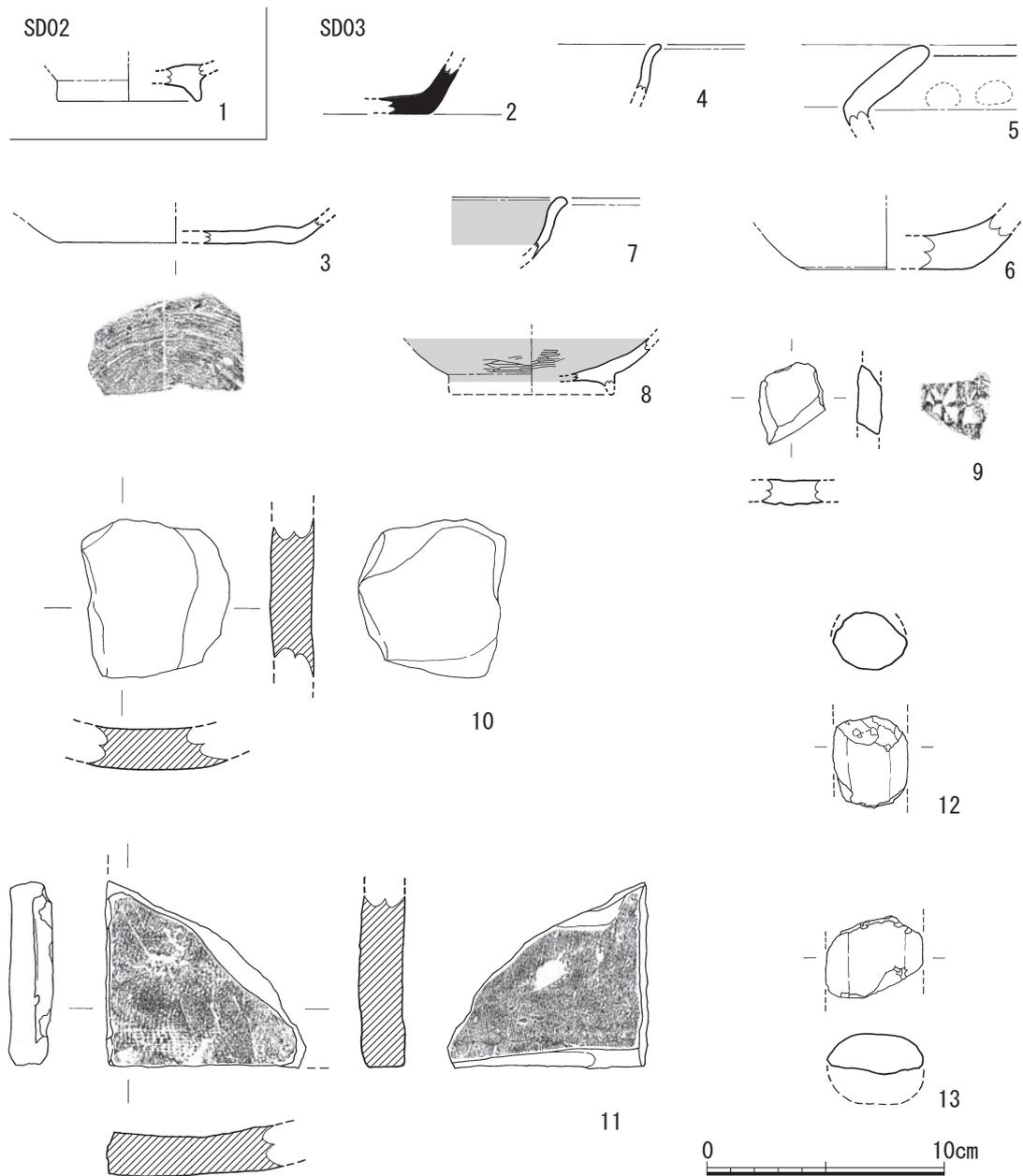
椀 (7・8) 7はA類。口縁部のみ的小片。端部は外方に開き、丸くおさめる。内面は横方向のミガキ。8はB類。体部は丸く、内外面ミガキが残る。

瓦質土器

鉢 (9) 器種判断に迷うが鉢とした。外面に「*」状のスタンプ文がある。

瓦

平瓦 (10・11) 10は焼成不良で磨滅も著しい。11は須恵質に焼成される。広端部にあたり、側面は凹面側から切った後折り取る。凸面にはわずかに格子目タタキが残る。



第5図 御供田遺跡第3次調査 SD02・03出土遺物実測図 (S=1/3)

土製品

棒状土製品 (12・13) いずれも小片である。破断面も磨滅している。

B. ピット

SP11 (第4図)

調査区の西側に位置し、SD03に近接する。不整形プランを呈し、検出面からの深さは27cm。建物を構成するようなものではない。出土遺物には、黒色土器と比較的新しい磁器がある。

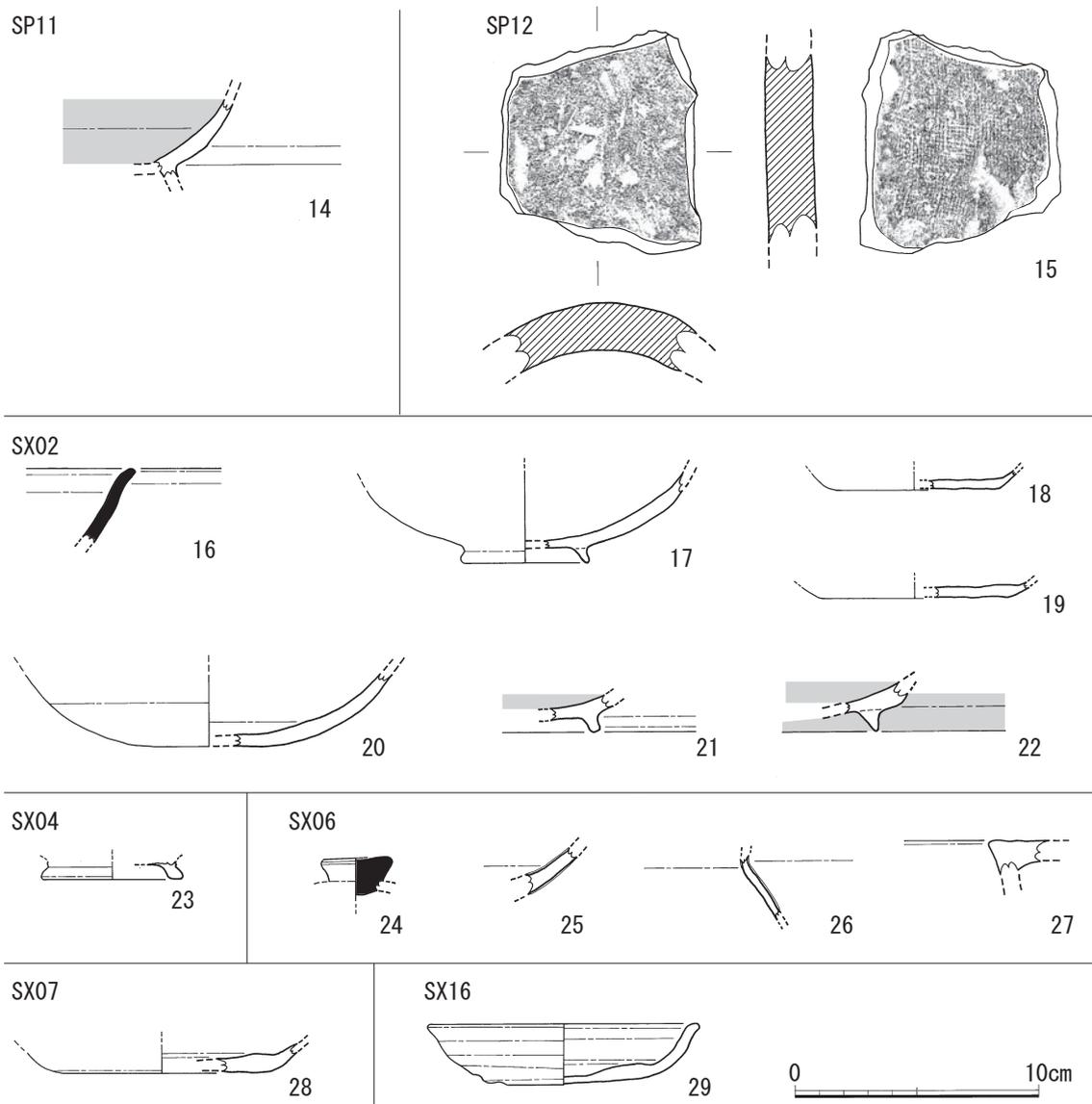
出土遺物 (第6図)

黒色土器

椀 (14) A類。小片のため、傾きに難がある。内面は不定方向のミガキが残る。

SP12 (第4図)

調査区の西側に位置し、SE01に近接する。径38~46cmの楕円形プランを呈し、検出面からの深



第6図 御供田遺跡第3次調査 SP、SX 出土遺物実測図 (S=1/3)

さは27cm。建物を構成する可能性はある。出土遺物には、土師器・瓦がある。

出土遺物（第6図）

瓦

丸瓦（15） 焼成不良で土師質であるが、凸面は破断面まで橙色になる。凹面に布目痕が残る。

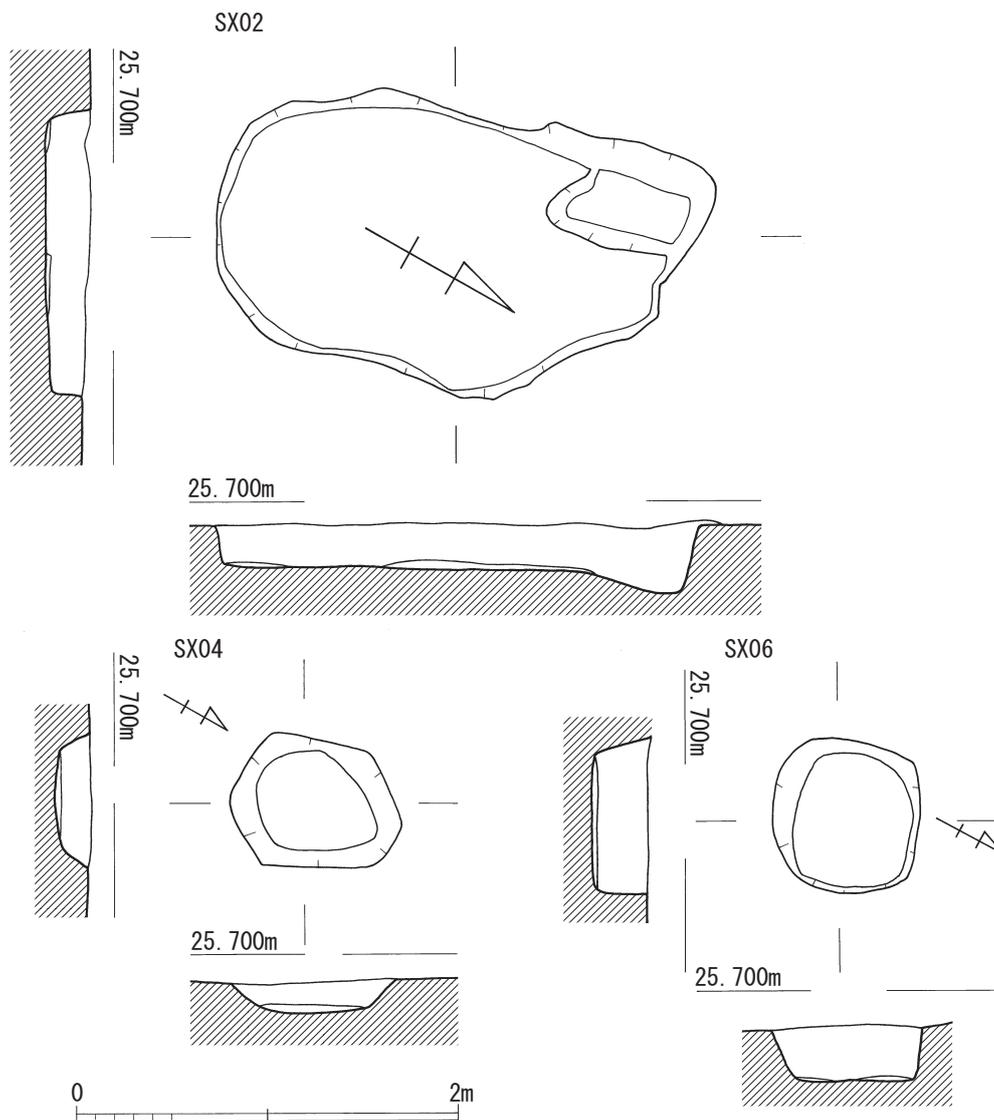
C. 土坑

SX02（第7図、図版2）

調査区の南西側に位置し、SX03を切る。長辺2.64m、短辺1.48mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは26cm。周壁は直立し、底面はほぼ水平であるが、北西隅は一部下がっている。埋土は褐色土を呈し、一部黄褐色粘質土をブロックで含む。出土遺物には、須恵器・土師器・黒色土器がある。遺物量は比較的多い。

出土遺物（第6図）

須恵器



第7図 御供田遺跡第3次調査 SX02・04・06実測図 (S=1/40)

杯身 (16) 口縁部のみの小片であり、杯の可能性も残る。端部はわずかに外方に開く。

土師器

椀 (17) 体部は丸く、高台は径が小さく、低く外方にふんばる。焼成不良。

小皿 (18・19) 底部のみの小片のため、確実ではないが小皿とした。磨滅が著しいが、いずれも底部外面ヘラ切り。19は底部外面に板状圧痕が残る。

丸底杯 (20) 底部のみの破片である。内面にはコテ当て痕が確認できる。

黒色土器

椀 (21・22) 21はA類。体部は丸く、高台は断面方形に近く、短くふんばる。22はB類。体部は丸く、高台は短く外側にふんばる。

SX04 (第7図)

調査区の南西側に位置し、SX02に近接する。長辺0.87m、短辺0.68mの略楕円形プランを呈し、検出面からの深さは18cm。底面はほぼ水平である。出土遺物には、須恵器・土師器がある。

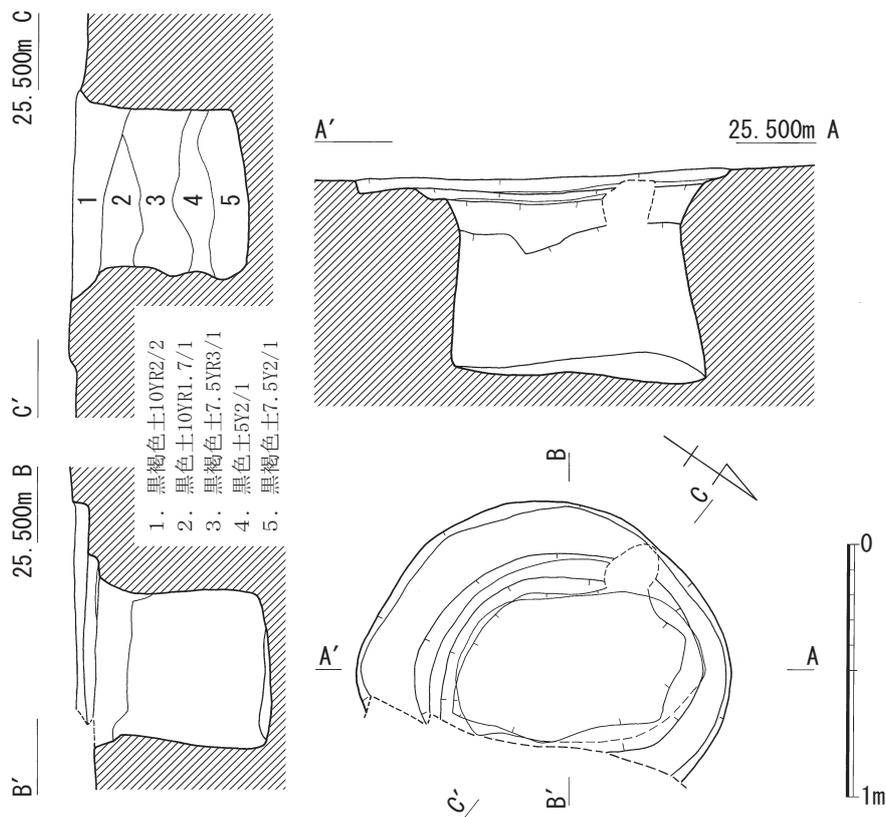
出土遺物 (第6図)

土師器

椀 (23) 高台のみである。断面方形に近く、外方に短くふんばる。

SX05 (第8図、図版2)

調査区のほぼ中央部に位置し、カクランに切られる。上段は長辺1.48m、短辺はカクランに切られるためよく分からないが、大きく楕円形プランに5cmほど掘り下げられた後、さらに長辺1.15m、短辺0.78m、深さ73cm掘り下げられる2段掘りの土坑である。周壁はややオーバーハングしており、



第8図 御供田遺跡第3次調査 SX05実測図 (S=1/30)

底面は平坦であるがやや北側に下がる。埋土は黒～黒褐色土であり、しまりある粘質の土であった。出土遺物はなかった。周辺の調査から井戸の可能性が高いと考える。

SX06 (第7図)

調査区の西隅に位置する。0.78～0.80mの隅丸方形プランを呈し、深さは29cm。周壁は直立に近く、底面はほぼ水平である。出土遺物には、須恵器・土師器・弥生土器および陶磁器がある。

出土遺物 (第6図)

須恵器

杯蓋 (24) つまみのみの破片である。土師質に焼成される。

陶磁器

皿 (25) 小片のため迷うが、龍泉窯系青磁皿としておく。大宰府陶磁器分類皿 I 類^(註1)。

壺 (26) 小片のため、傾きに難がある。内面は露胎。頸部内面まで施釉される。

弥生土器

甕 (27) 口縁部だけの小片である。磨滅が著しいが、内外面とも赤彩される。

SX07 (第9図)

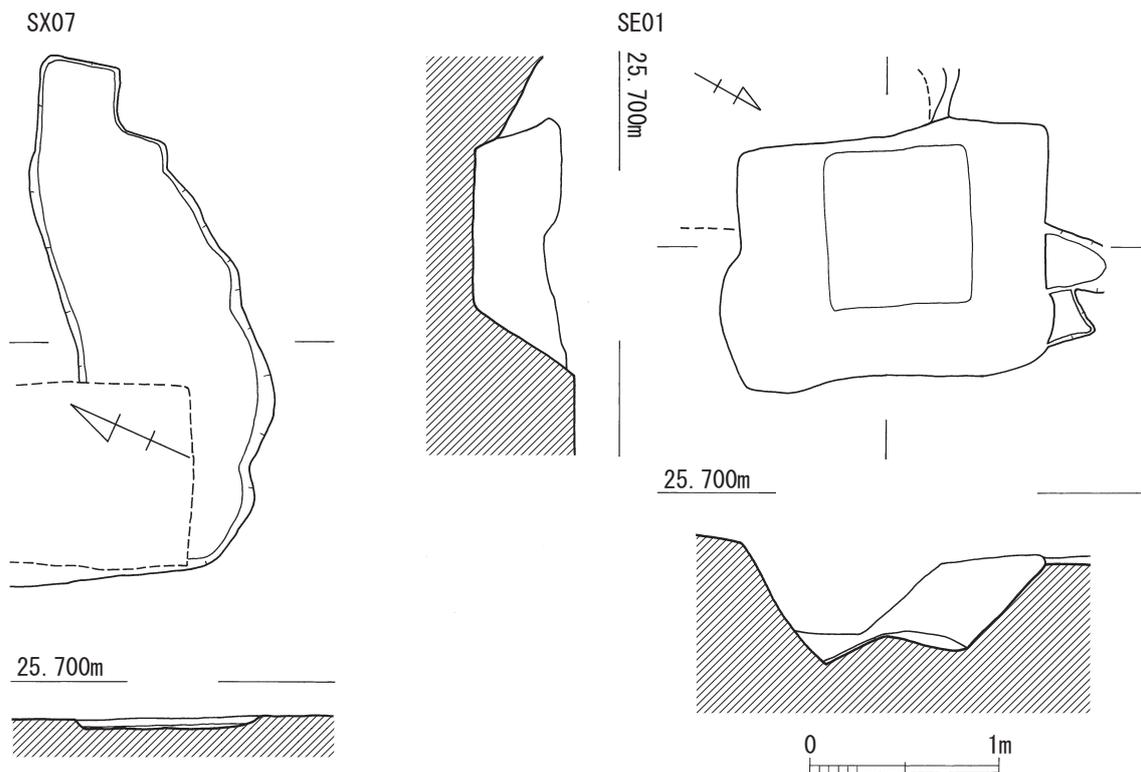
調査区の西側に位置し、カクランに切られる。長辺2.80m、短辺0.95mの不整形プランを呈し、検出面からの深さは9cm。底面はほぼ水平で浅い。出土遺物には土師器がある。

出土遺物 (第6図)

土師器

杯 (28) 小片のため、反転復元に難がある。底部外面ヘラ切り。体部は大きく外方に開く。

SX16 (第4図)



第9図 御供田遺跡第3次調査 SX07、SE01実測図 (S=1/40)

調査区の北側に位置する。長辺1.38m、短辺0.28mの長楕円プランを呈し、床面は中央部が深く、不整形となる。出土遺物には土師器に加え片岩があるが、製品では無い。

出土遺物（第6図、図版16）

土師器

杯（29） 復元口径11.2cm、器高2.5cm。底部外面ヘラ切り、黒斑が残る。山本編年X～X I期^(註2)。

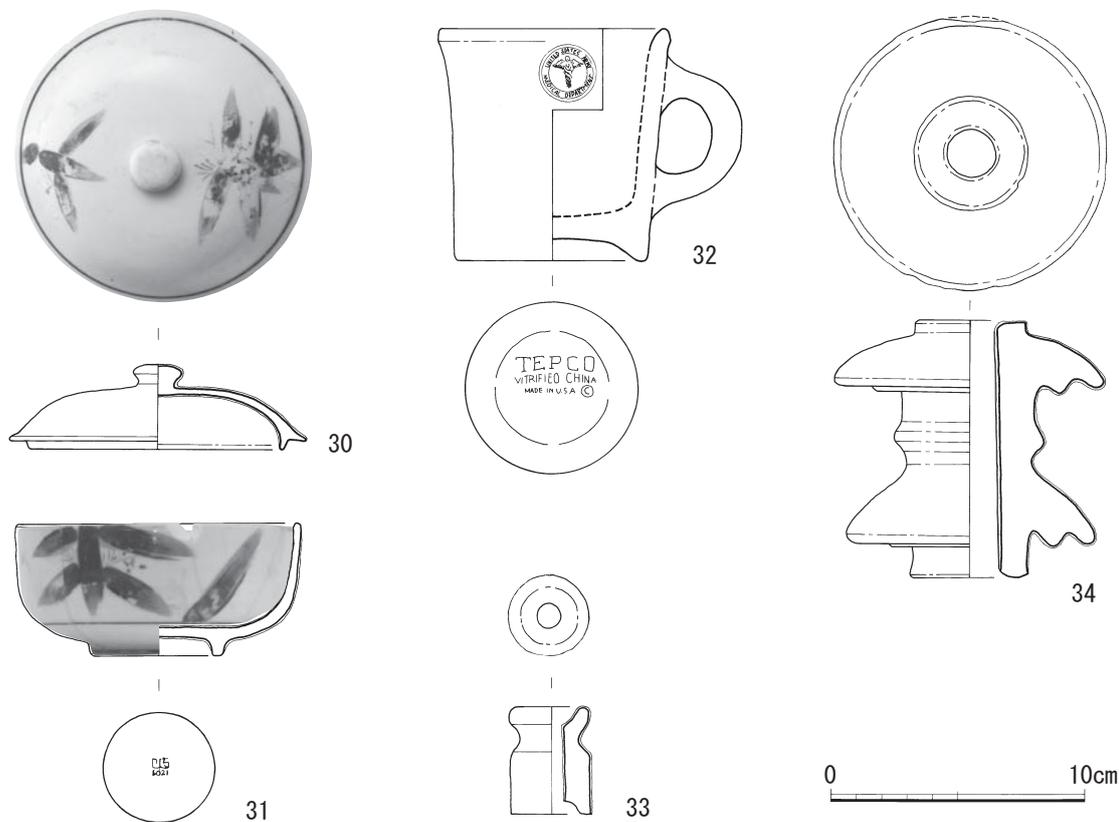
D. 不明遺構、カクラン

SE01（第9図）

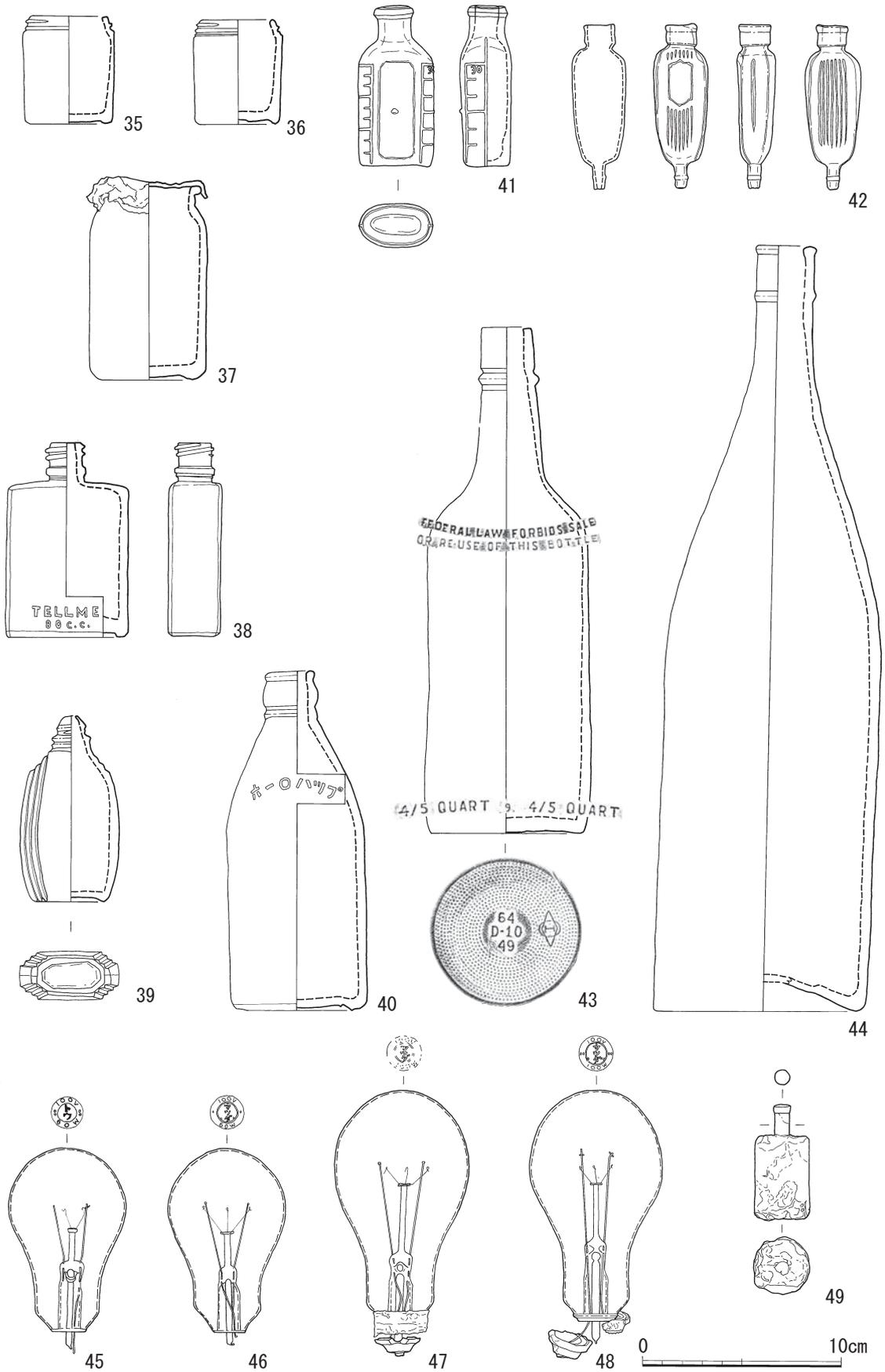
調査区の西側に位置し、カクランに切られる。長辺1.75m、短辺1.37mの長方形プランを呈し、床面は凹凸があるが、検出面から最も深いところで68cmある。出土遺物には、磁器や鉄製品のほかガラス製品が完形で多く出土した。井戸として調査を実施したが、出土遺物の内容から見ると現代に掘られたカクランと考えられ、その中には米軍が持ち込んだと考えられるものがある。調査地は、JRの線路を挟んだ西側に米軍板付基地春日原住宅地区があることから、米軍ハウスなどの撤去時に廃棄されたものと考えられることから、図化して資料化することとした。また、カクラン出土遺物についても、同様の視点で取り上げを行った。

出土遺物（第10～12図、図版16～18）

磁器



第10図 御供田遺跡第3次調査 SE01出土遺物実測図①（S=1/3）

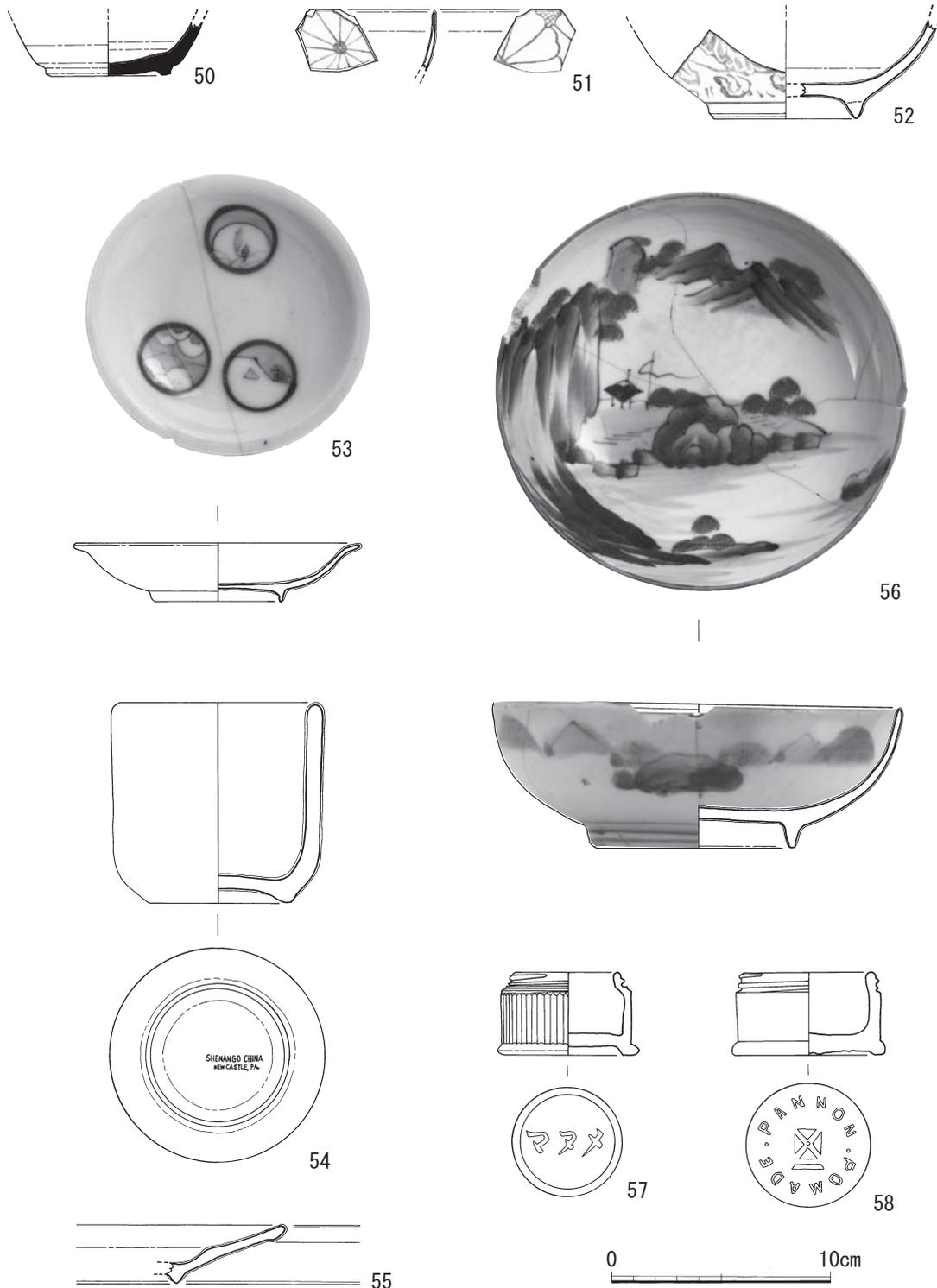


第11図 御供田遺跡第3次調査 SE01出土遺物実測図② (S=1/3)

蓋 (30) 31の深皿とセットになる。外面に赤と朱色で竹状の文様と間に花芽状の文様を配する。

深皿 (31) 30とセットになる。蓋と同様の文様を体部に描く。体部に1条、高台外側に2条赤で
 圏線をめぐらす。高台内には「岐1021」の統制番号が入る。

マグカップ (32) 厚手のものである。底面の銘から、アメリカ TEPCO 社製のものであることが
 分かる。外面には円形のスタンプ文があり、中心に米陸軍医療科のシンボルマークと銘がめぐる。



第12図 御供田遺跡第3次調査カクラン等出土遺物実測図 (S=1/3)

罫子 (33・34) 33は小型のもので白色の胎土。34は大型のもので褐色の釉がかかる。

ガラス製品

瓶 (35~44) 35・36は広口瓶。濃い茶色で、ガラス内には気泡が入る。37も広口瓶。やや緑があった透明瓶で、鉄製の蓋がつく。38は側面に「TELL ME」とエンボス加工される乳白色の化粧品瓶である。39は透明の香水瓶。40は肩部に「六一〇ハップ」とエンボス加工される入浴剤瓶である。41は薬瓶。体部中央にラベル貼付用の台部、側面に目盛りが陽刻される。42は両口式点眼瓶。43はウイスキーボトル。肩部に「連邦法は販売または再利用を禁じます」との内容が英語で書かれ、底面には製造業者（オーウェンズ・イリノイ社）のロゴと許可番号、製造年（1949年）が書かれる。44は一升瓶。底部には孔があげられている。

電球 (45~48) いずれも100ボルト60ワットの白熱電球である。45・46は口金を失う。35はトウ、他はマツダとメーカー名が書かれる。

不明

電池? (49) 用途不明の遺物。電池であろうか? 先端部に銅製のキャップがはまる。

カクラン出土遺物 (第12図、図版19~20)

須恵器

杯身 (50) 高台部付近の小片である。高台は短く低くふんばる。

磁器

椀 (51・52) 51は染付。内外面に菊花が描かれる。52は青磁。外面に唐草が印刻される。

皿 (53・55) 53は4寸皿。内面は丸に月、梅、風景を描く。55は洋皿。アメリカ製か?

鉢 (54) 筒形を呈する。底面に「シェナンゴ チャイナ」のプリントがある。

深皿 (56) 染付。内面に山水図を描く。

ガラス製品

瓶 (57・58) いずれもポマード瓶。57は「メヌマ」、58は「PANNON」と銘がある。

(3) 小結

ここで第3次調査の遺構変遷について整理を行う。弥生時代から奈良時代にかけては明確な遺構はない。小片のため時期が確定しづらいが、SD02、SX02・07は中島編年^(註3)より10~11世紀。SX16は10世紀後半~11世紀中頃。SD03は10世紀後半から11世紀前半を中心とし、最終的な埋没は12世紀中頃~後半と見られ、SX06も同様である。SE01は、統制磁器(31)やウイスキーボトル(43)といった昭和20年代のものを端緒とし、下限はおおむね昭和30年代までに絞られそうである。昭和37年の住宅地図から調査地周辺に米軍ハウスがあったことが確認でき、その由来がうかがえる。

註1 山本信夫2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会

註2 山本信夫1990「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会

註3 中島恒次郎1992「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』日本中世土器研究会

2. 第4次調査

(1) 調査概要

御供田遺跡第4次調査地は、大野城市白木原1丁目312-1に所在する。事業対象面積2207.94㎡全体を対象として調査を行った。調査は北半部から開始し、次いで南半部、中央部と三回に分けて調査を実施した。このため、調査区ごとに溝の遺構番号を変えて調査を進めることとした。

発掘調査地は、脊振山系から北側にのびる丘陵地が平野になった部分に位置し、第3・6次調査地に隣接する。調査の結果、溝・ピット・土坑が確認された。溝は調査区内を縦横に走り、幅や深さも大小様々あるが、特に注目されるのは、調査区内でL字形に曲がる溝である。溝の内側は掘立柱建物を構成すると考えられるピットが多く確認されるが、外側は少なくなっており集落の内と外を分けるものであったと考えられる。なお、掘立柱建物を明確に確認することはできなかったが、ピットの中には土師器・黒色土器を埋納したのがあり、10世紀代の集落であったと考えることができるようになった。調査地から東側200mには近世白木原村と考えられる後原遺跡の調査が行われている一方で、周辺の調査を見る限り、第4次調査地は中世白木原村の中心ではないかと考えることができ、御供田遺跡の内容を知る上で非常に貴重な調査となった。

(2) 遺構と遺物

A. 溝

SD01 (第13・15図、図版6)

調査区のほぼ中央部に位置し、北東から南西方向にほぼ直線的にのびた後、緩やかに北側へ蛇行する。SD22に切られる。幅0.55～0.72m、検出面からの深さは13～35cmで南西側が深くなるが、底面の標高はほぼ変わらない。埋土は灰褐色～灰色粘質土で粘性がある。SD01周辺は溝が集中し、調査区北半部を囲むように配置されることから一連のものと考えられる。出土遺物には須恵器・土師器・瓦質土器があるが、小片であり図化できるものはなかった。

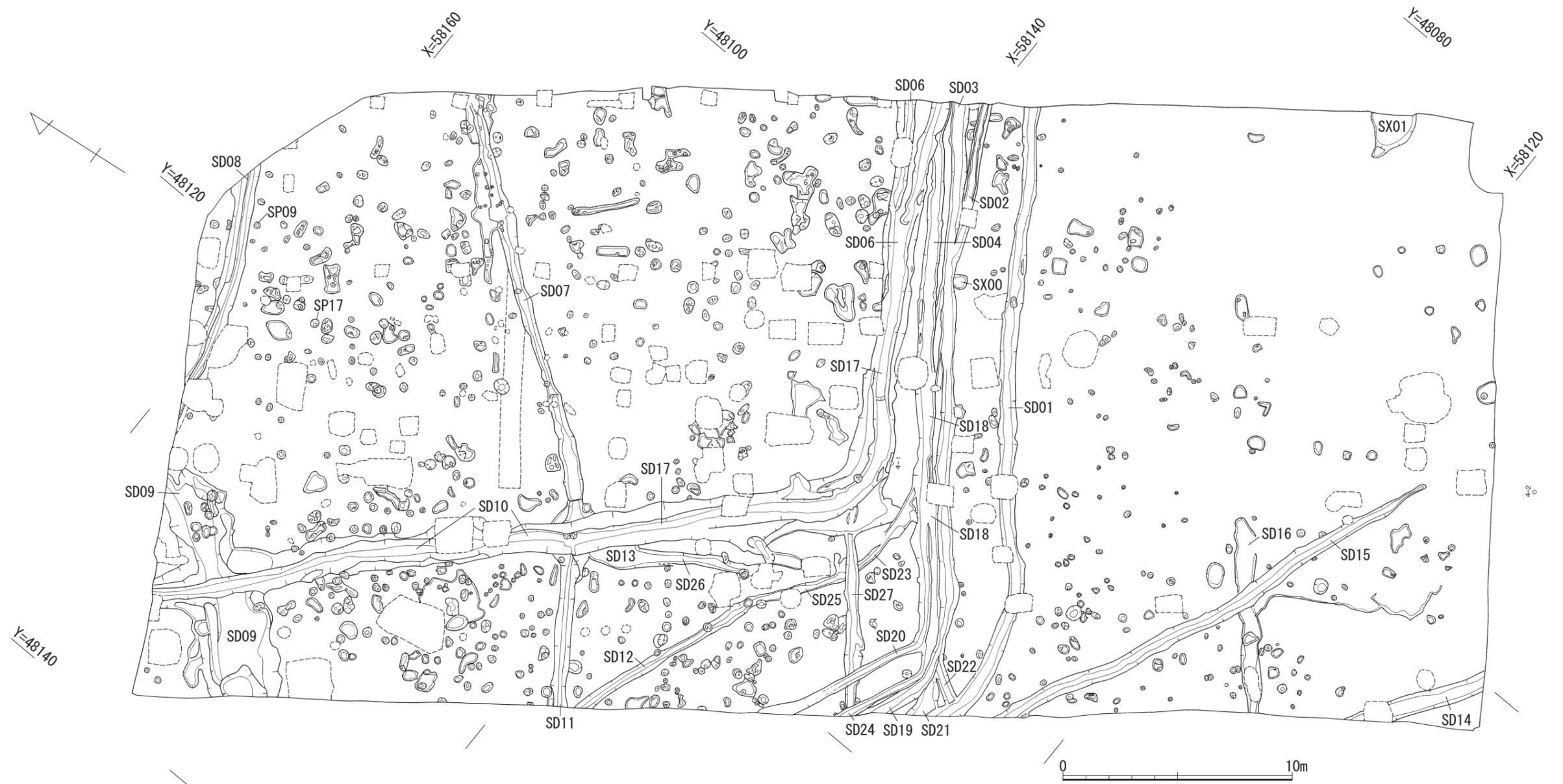
SD02～05・18・22 (第13・15・18図、図版9)

調査区の中央部に位置し、北東から南西方向にほぼ直線的にのびた後、緩やかに北側へ蛇行する。調査着手時には、東側壁際でSD02～04とSD06を確認し4本の溝があるものとして調査を進めていたが、SD04を切るSD05が確認され、さらに溝の埋土の中に新たな溝が切り込まれることが判明し、調査区の中ほどで平面での検出が難しくなった。このことから、西半部においてはSD18として調査を進めることにしたものである。

SD02は、幅0.52～0.55m。検出面からの深さは21～26cm。隣接するSD03を切ることを確認しているが、調査区東側壁際より約6mの所から平面での確認ができなくなった。埋土は黒褐色～暗褐色土である。

SD03は、幅0.70m。検出面からの深さは15cm程度。調査区東側壁際から約3.1mでSD02に切られる。埋土は灰色～暗褐色土。

SD04は、幅0.65m。検出面からの深さは15～20cm。調査区東側壁際から11.2mを確認した。埋



第13図 御供田遺跡第4次調査遺構配置図 (S=1/200)

土は灰オリーブ色土。

SD05は、調査区東側壁際から8.5～10.2mの所でSD04とSD03の間で確認した。ただし、図化はできず、後に述べるSD18内で確認された溝と考えられる。埋土は暗褐色土。

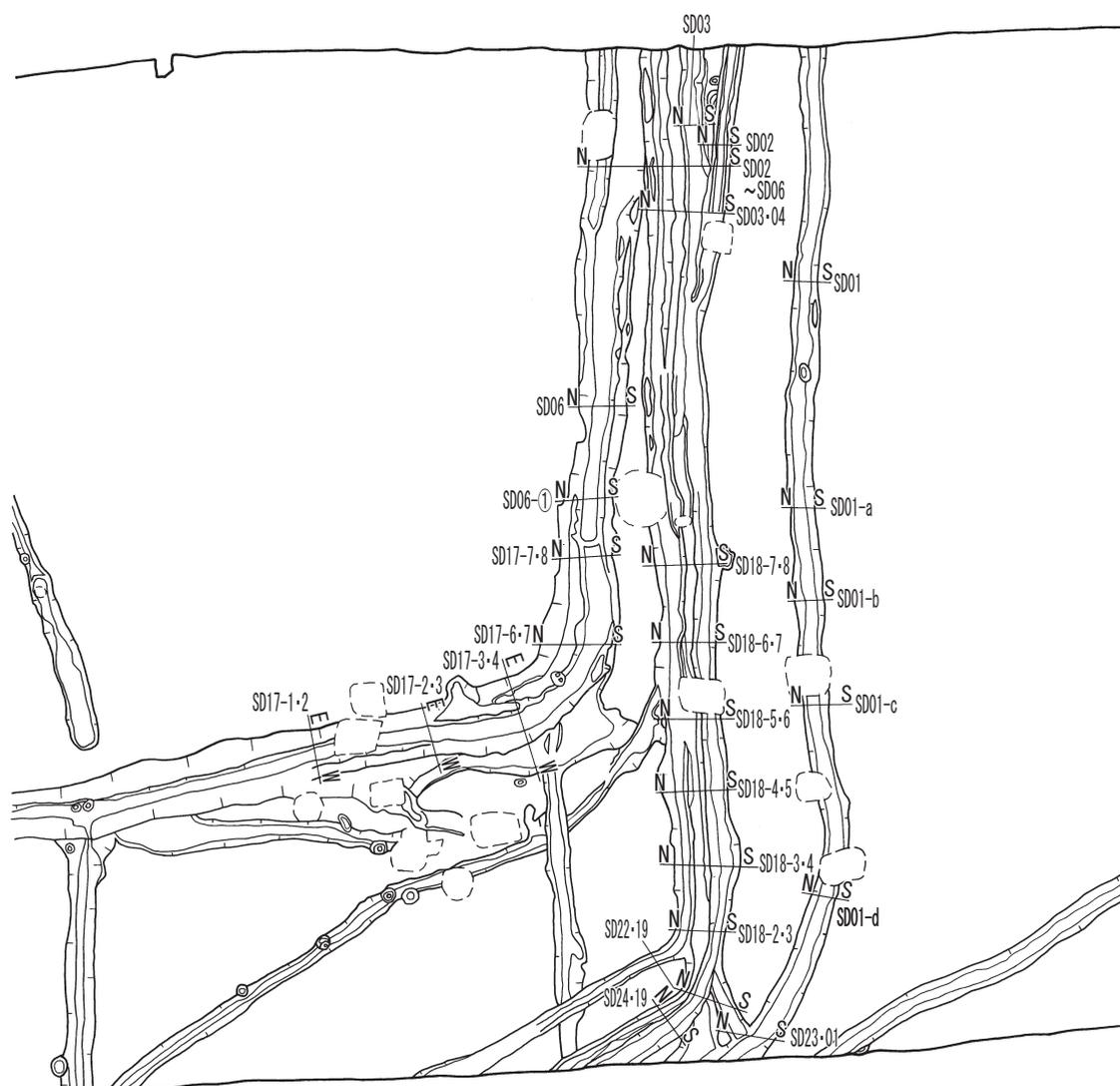
SD18は、調査区東側壁際より約12mの所から西側の溝とした。約11.5m伸びた後に5本の溝(SD19～22・24)に枝分かれしている。幅1.24～1.73m。検出面からの深さは18～30cm。土層からすると、東半部は3～4本、西半部は3本の溝が切り合っている。最終的には幅58～84cm、深さ18～24cmの溝を掘っている。この溝をSD22とした。

出土遺物としては、SD02からは土師器、SD03からは須恵器・土師器、SD04からは須恵器・土師器・黒色土器・瓦・磁器、SD05からは土師器、SD18からは須恵器・土師器・磁器、SD22からは出土遺物はなかった。

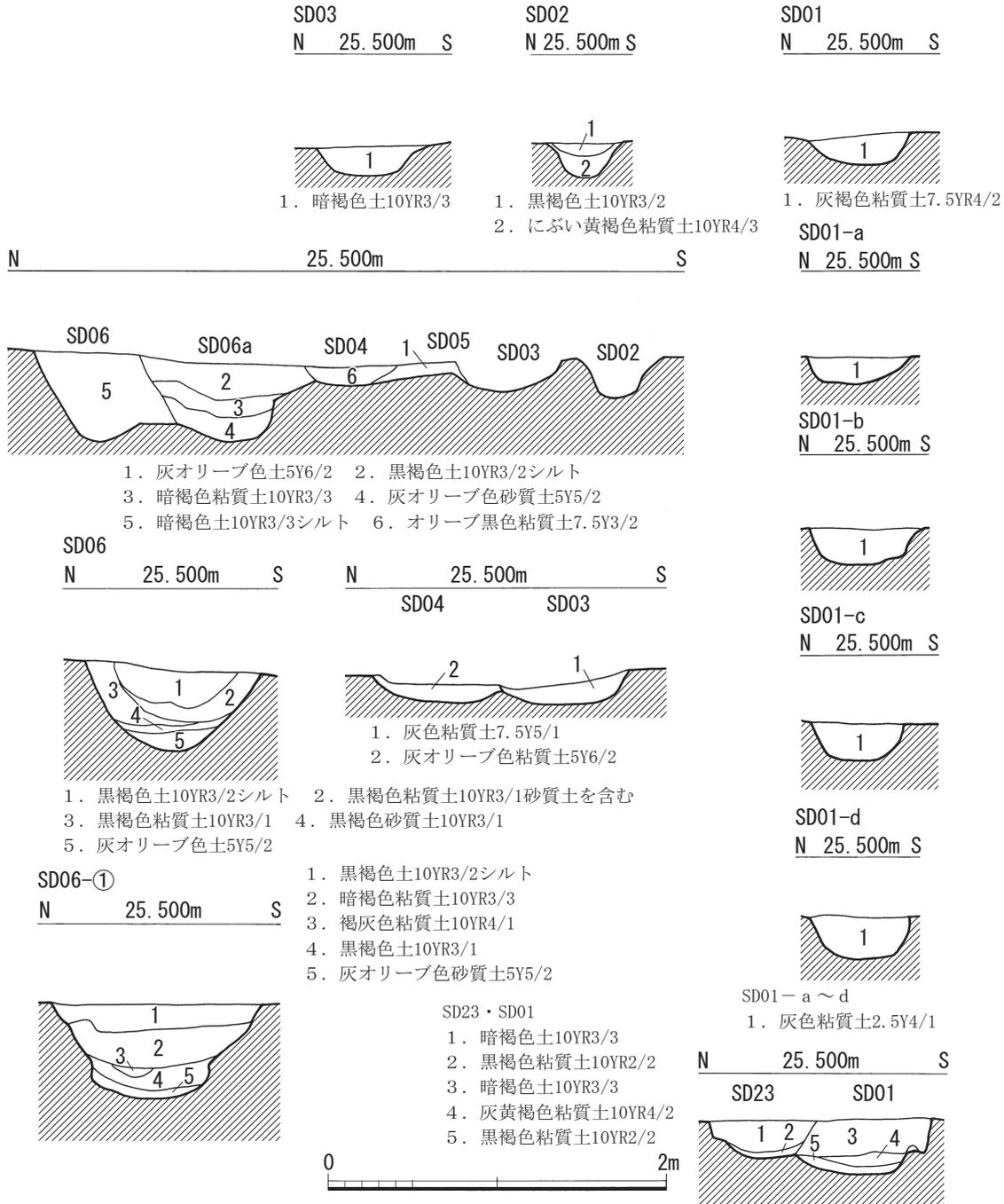
SD04出土遺物 (第16図)

土師器

椀 (59) 高台部のみ的小片である。中島分類土師器・椀Ⅲ形式にあたる^(註3)。



第14図 御供田遺跡第4次調査 SD 土層実測位置図 (S=1/200)



第15図 御供田遺跡第4次調査 SD01～06土層実測図 (S=1/40)

丸底杯 (60) 底部は丸く、外面に板状圧痕が見える。内面は煤が付着しており、被熱を受ける。

瓦

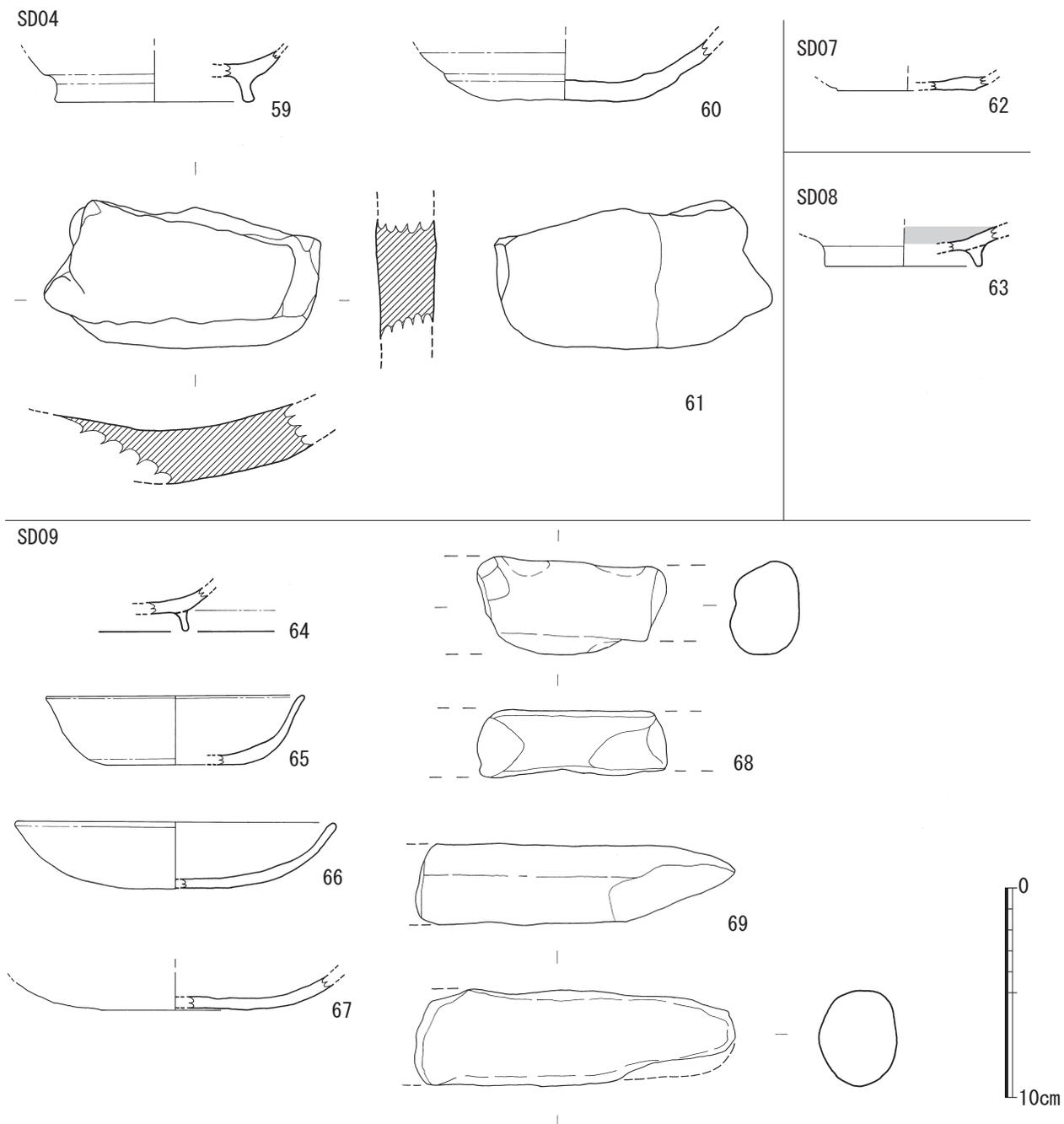
平瓦 (61) 焼成が甘く、軟質である。凸面は斜格子タタキであろうか。

SD18出土遺物 (第21図)

瓦質土器

火鉢 (105) 樽型のもので体部のみの小片。体部下位に低い突帯を有する。外面煤付着。

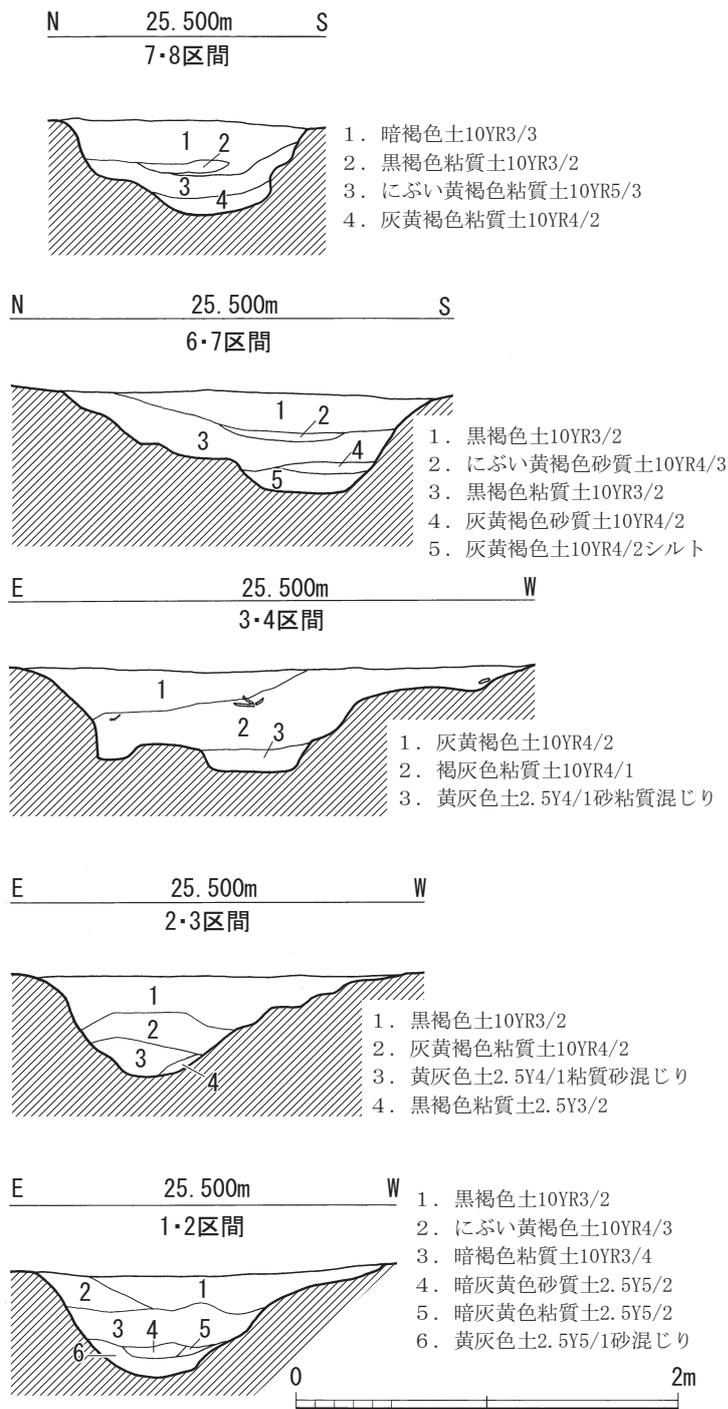
SD06・10・17 (第13・15・17図、図版7・8)



第16図 御供田遺跡第4次調査 SD04・07～09出土遺物実測図 (S=1/3)

調査区の中央部に位置し、北東から南西方向にほぼ直線的にのびた後、北西方向に向きを変え、直線的にのびて調査区外へいたる。調査着手時には、東側壁際でSD04に切られる溝SD06として調査をおこなった。また、調査区はL字形に設定したため、北側壁際から南東方向へのびる溝をSD10として調査を進めていた。最終的に中央部分の西側を調査した際にL字形に曲がる溝SD17を検出した。こうして、SD06・10・17は一連の溝であることが判明したものである。

SD06としては、調査区東側壁際から約12mまでを調査した。壁際ではSD04に切られるため幅は明らかではないが、SD04と切り合う部分では1.5mほど、最も狭い部分でも1.05mである。検出面



第17図 御供田遺跡第4次調査 SD17土層実測図 (S=1/40)

多い。

SD10出土遺物 (第19図)

須恵器

杯身 (70・71) いずれも高台部のみの小片。高台は低く逆台形状になる。

土師器

椀 (72・73・77) 72は体部中位に屈曲をもち、口縁端部は外方に広がる。73は体部は丸く、口

からの深さは50~60cmほどで、溝の断面は浅いU字形を呈し、溝底の標高はほぼ一定である。

SD17はSD06とした部分から、ほぼ90度北西に向きを変え、約8mまでを調査した。SD27に切られる。幅は1.3~1.93mで、屈曲部では大きく広がる。検出面からの深さは52~58cmほどで、溝底の標高は北西部にむかって次第に上がっていく。埋土は黒褐色土から灰黄褐色土で、下層は砂質土である。

SD10はSD17とした部分からまっすぐ北西方向にのびる。SD07・11と切り合うが、SD10との新旧関係は明らかにできず、同時併存した可能性が高い。北側壁際にて検出したSD09も同様である。幅は北西側に向かってやや幅を減じ、1.42~1.67mである。検出面からの深さは55~60cmほどで、溝底の標高は北側壁にむかって緩やかに上る。埋土は黄灰色土~灰色土を中心とする。出土遺物としては、SD06からは須恵器・土師器、SD10からは須恵器・土師器・黒色土器・陶器がある。SD17からは須恵器・土師器・黒色土器・瓦が出土し、量は非常に

縁端部は丸くおさめる。77は高台部の小片。底径の復元に難があり、もう少し大きくなると考えられる。

杯 (74~76) 74は底部外面に板状圧痕が残る。ヘラ切り。75は体部は大きく外方に開く。ヘラ切り。76は底部外面に板状圧痕が残る。ヘラ切り。

丸底杯 (79) 体部は丸いが杯部は浅い。外面は被熱により煤がつく。

甕 (80) 口縁部のみ的小片。体部は直立し、外面ハケメを施す。

黒色土器

椀 (78) 高台部のみ的小片。体部は丸く、高台は細く高くふんばる。

陶器

椀? (81) 口縁部的小片。黄褐色の釉が内外面にかかる。近世以降のものと考えられる。

鉄製品

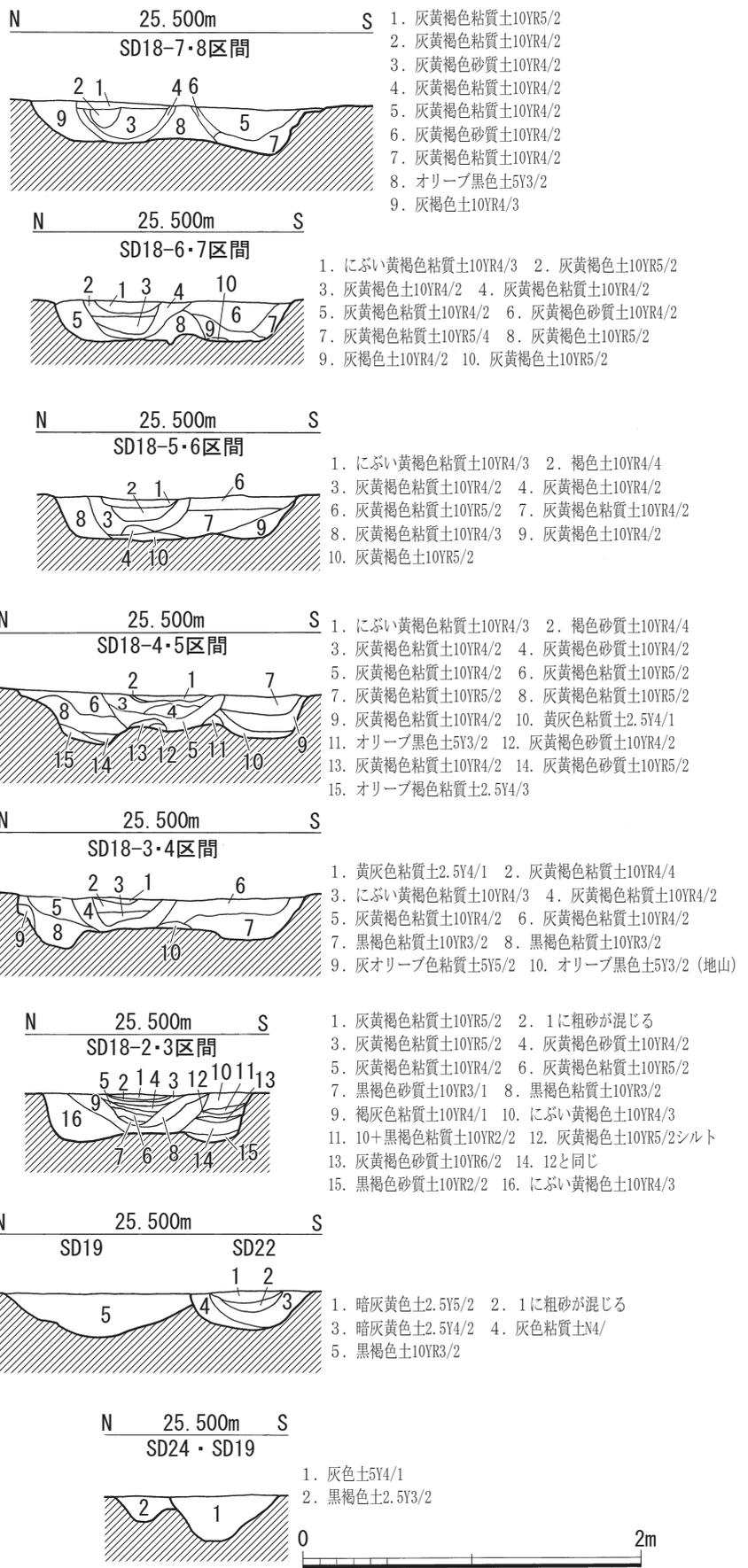
不明製品 (82) 直径3mm。針金状であるが、全形はよく分からない。近世以降のものと考えられる。

SD17出土遺物 (第20図)

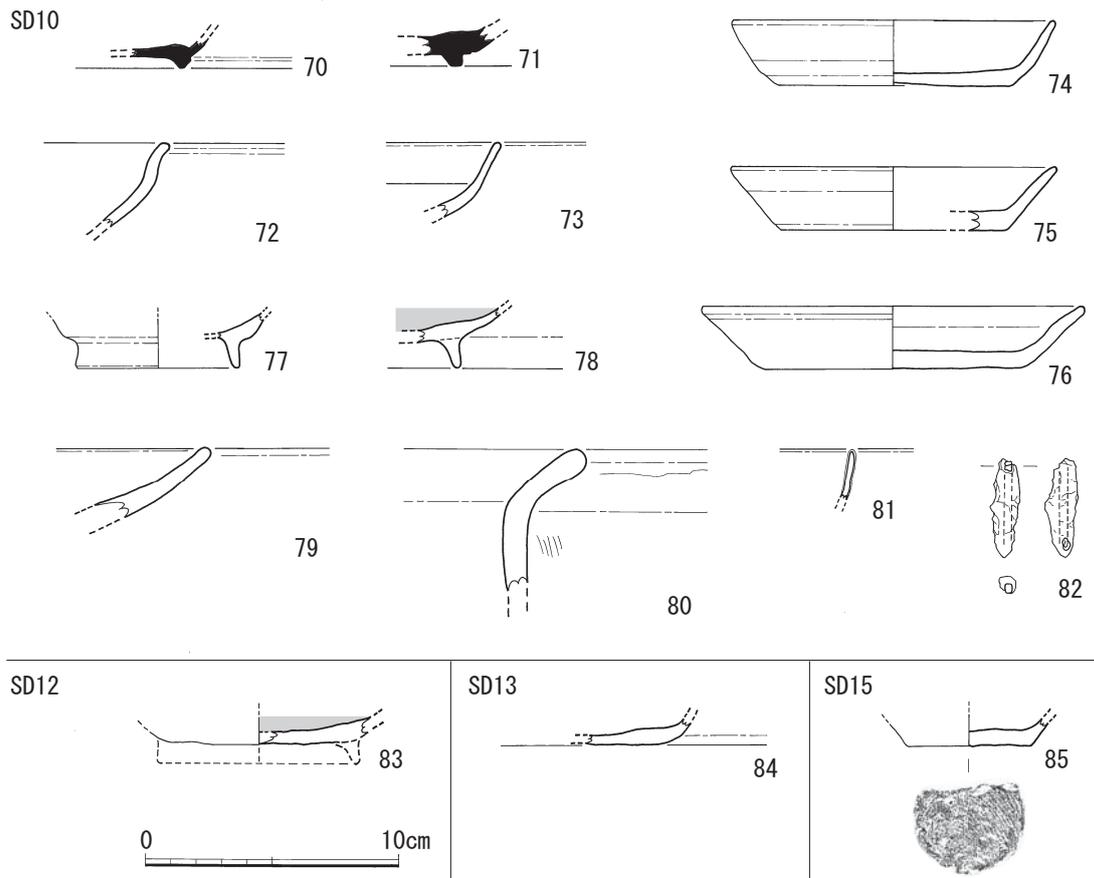
須恵器

杯蓋 (86) 灰白色を呈し、やや焼き上がりはあまい。口縁端部は鳥嘴状に折り曲げられる。

杯身 (87・88) いずれも



第18図 御供田遺跡第4次調査 SD18・19・21・22・24土層実測図 (S=1/40)



第19図 御供田遺跡第4次調査 SD10・12・13・15出土遺物実測図 (S=1/3)

低く短い高台をもつ。88は内端部で設置し、壺類の可能性もある。

皿 (89) 底部はナデで仕上げる。体部は外方へ大きく開く。

壺 (90) 二重口縁を呈し、頸部は細くしまる。内外面に自然釉が付着する。

甕 (91・92) いずれも大甕の頸部片。91は外面に2条沈線をめぐらす。92は無文。

土師器

椀 (93) 体部は丸くなる。高台は径は小さく、低く断面長方形になる。

杯 (96~101) 96は体部は大きくひらく。内外面にミガキを施す。97は96と同一器種。底部のみであるが、外面回転ヘラ削り。98も底部外面に回転ヘラ削りを施す。99は磨滅により内外面調整不明。100は96・97と同一器種。底部外面回転ヘラ削り。101は底部外面ナデ。内面は煤がつく。

甕 (102・103) いずれも口縁部は短く外反する。103は口縁部内面に煤が付着する。

黒色土器

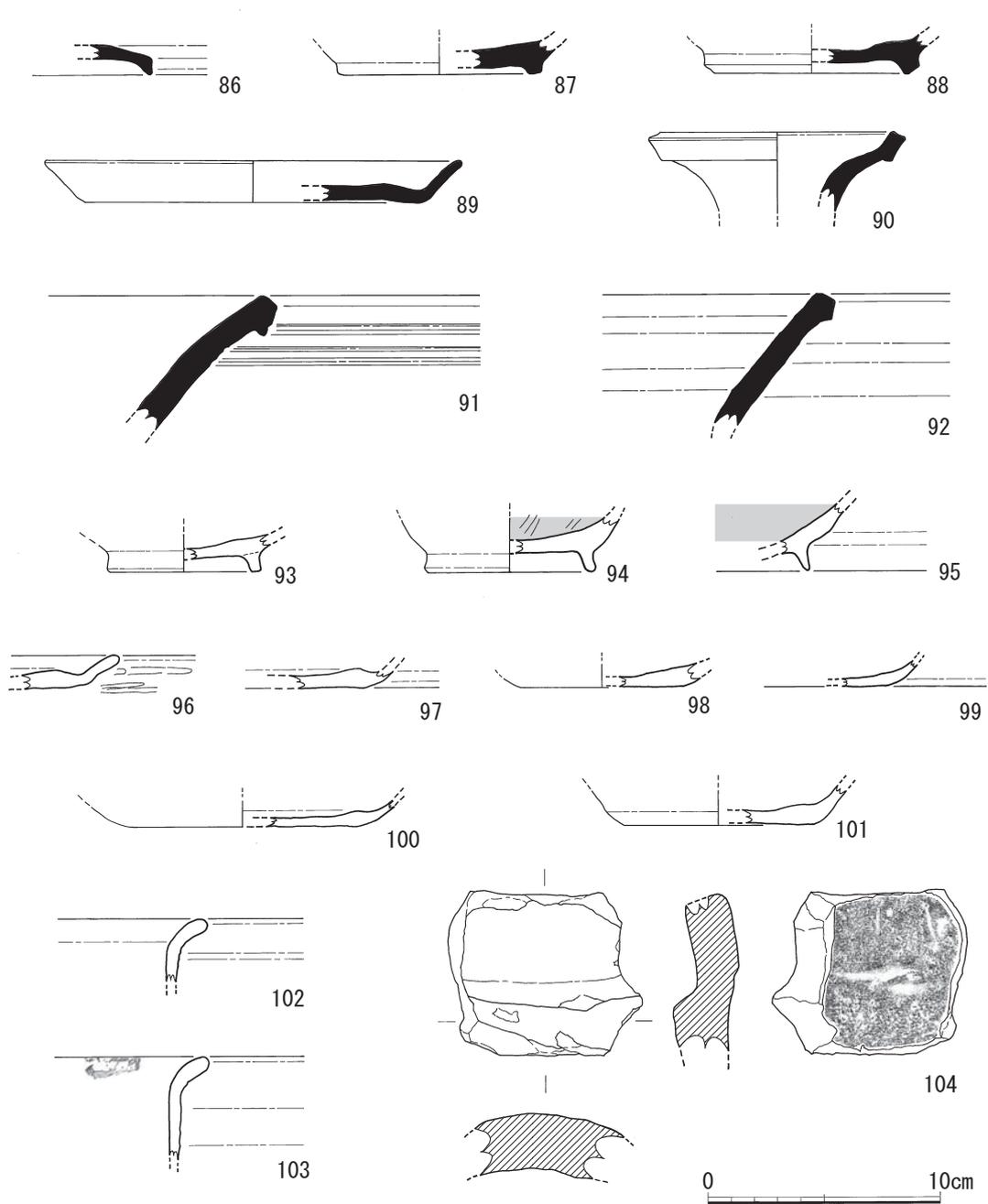
椀 (94・95) いずれもA類。94は体部は丸くなる。95も体部は丸く、高台は細く外方にふんばる。

瓦

丸瓦 (104) 玉縁付丸瓦である。焼成不良で、凹面にわずかに布目を残すのみである。

SD07 (第13図)

調査区の北側に位置し、北東から南西方向にまっすぐのびる。先述のようにSD10とは同時併存



第20図 御供田遺跡第4次調査 SD17出土遺物実測図 (S=1/3)

していたと考えられる。溝は一部不整に広がるが、幅0.33~0.93mである。検出面からの深さは東側については10~14cmと浅く溝底の標高はほぼ同じであるが、SD10側では深くなり25cmほどとなる。埋土は暗褐色土を主体とする。出土遺物には、須恵器・土師器がある。

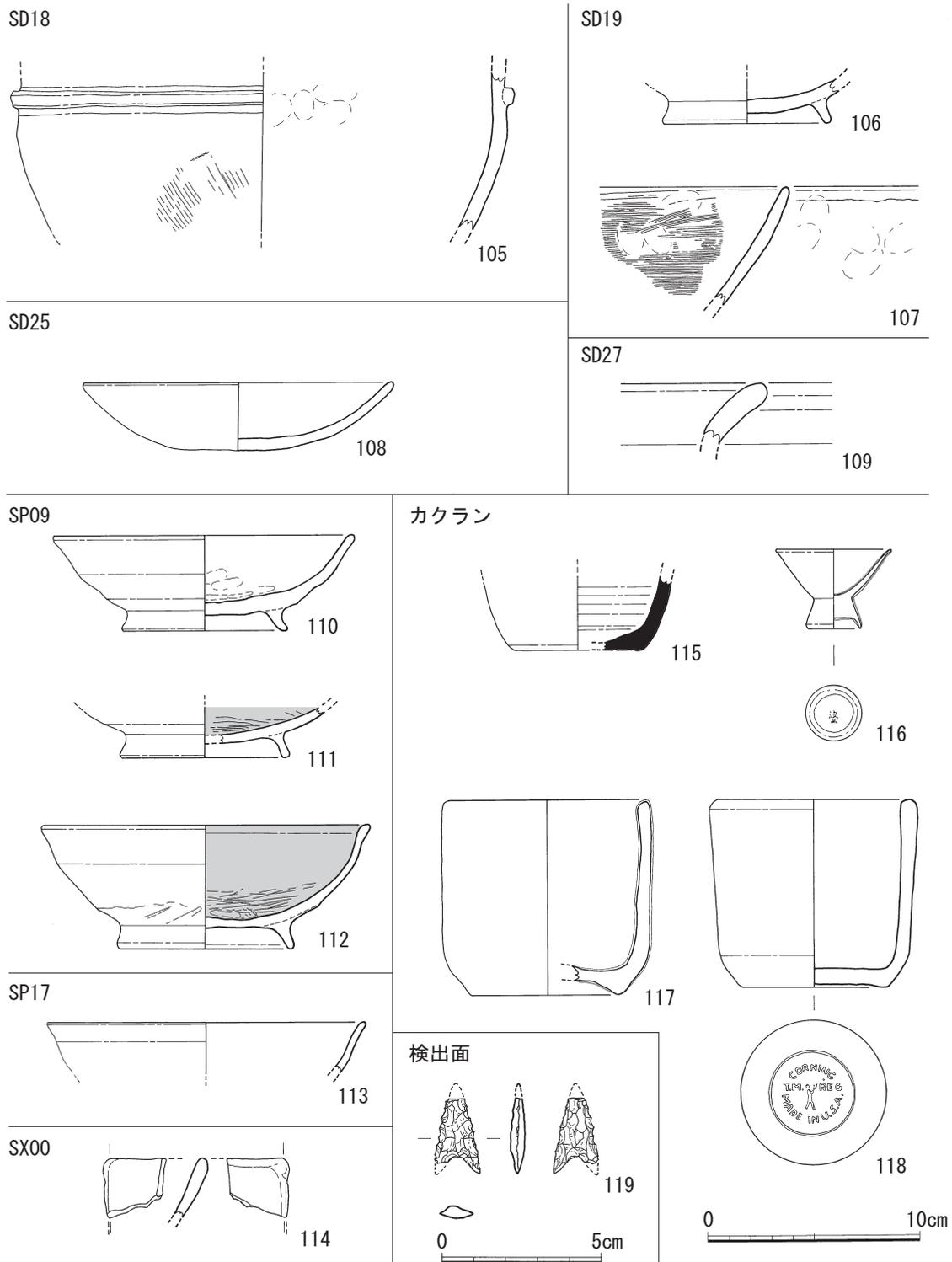
SD07出土遺物 (第16図)

土師器

小皿 (62) 底部糸切り。体部を失うが、大きく開くようである。

SD08 (第13図、図版7)

調査区の北側壁際に位置する。緩やかに蛇行して調査区外にのびる。幅は79~103cm、検出面か



第21図 御供田遺跡第4次調査 SD18・19、SP、SX、カクラン、検出面出土遺物実測図（119はS=1/2、他はS=1/3）

らの深さは43～51cm。溝底の標高はほぼ変わらない。埋土は褐色土を中心とする。出土遺物には、土師器・黒色土器がある。

出土遺物（第16図）

黒色土器

椀 (63) A類。体部は丸くなる。磨滅が著しい。

SD09 (第13図、図版7)

調査区北側に位置する。SD10をまたぎ、不整形に広がる。幅は0.90～4.35m、検出面からの深さは、東側は17～48cmで溝底はSD10にむかって緩やかに下る。西側は40～50cmで溝底は西側にむかって下り、調査区西側壁際には長辺2.1m、短辺1.34m、溝底からの深さ15～27cmの楕円形プランの土坑が掘り込まれる。出土遺物には、須恵器・土師器・土製品がある。

出土遺物 (第16図、図版20)

土師器

椀 (64) 高台部のみ的小片。体部は丸く、高台は細く高い。

杯 (65) 底部から体部にかけて丸く、椀の可能性もある。杯部は深い。

丸底杯 (66・67) 66は杯部が浅く、口縁部内面に煤がつく。67は底部は平底に近い。

土製品

棒状土製品 (68・69) いずれも焼成があまく軟質。68は断面長方形で緩やかに湾曲する。69も断面長方形に成形される。

SD11 (第13図)

SD11は調査区の西側に位置し、まっすぐのびて調査区外にいたる。溝底の状況から、SD10と同時併存するものと考えられる。SD07の反対側に位置するが、SD11とは方向が異なる。幅は0.63～0.87m、検出面からの深さは30～41cm。溝底の標高はSD10にむかって下がり、落ち込んでいく。出土遺物には土師器があるが、小片のため図化できなかった。

SD12・23・25 (第13・14図)

SD12・23・25は調査区の西側に位置する。SD18から分かれて北東方向にのびており、SD17を切り、SD27に切られる。SD27とSD18の間をSD23、SD27から調査区までをSD12・25とした。幅は0.31～0.61m、検出面からの深さは9～22cm。溝底の標高は、SD18にむかって緩やかに下がる。埋土は灰黄褐色土～黒褐色土。出土遺物には、須恵器・土師器・黒色土器がある。

SD12出土遺物 (第19図)

黒色土器

椀 (83) 高台を失う。体部は丸くなる。

SD25出土遺物 (第21図)

土師器

丸底杯 (108) 杯部は浅く、底部の丸みはあまりない。

SD13・26 (第13図)

調査区の西側に位置する。SD10に接する部分をSD13とし、南半部をSD26とした。SD10とSD11の交点近くから南側にのびた後にカクランに切られており、その続きは確認できない。SD10との切り合いは不明である。幅は0.40～0.80m、検出面からの深さは2～13cmで、溝底の標高はSD10にむかって下がる。出土遺物には、土師器・黒色土器がある。

SD13出土遺物 (第19図)

土師器

杯 (84) 底部外面ナデ。底部から体部にかけて丸く仕上げる。

SD14 (第13図)

調査区の南側に位置する。北西から南東方向にほぼまっすぐのびて調査区外にいたる。幅は0.70～0.88m、検出面からの深さは10～20cm。溝底の標高はあまり変わらない。埋土は灰色～灰褐色土で粘性がある。出土遺物はなかった。

SD15 (第13図、図版8)

調査区の南側に位置し、南側壁近くから始まり、北西方向にのびた後、調査区外へいたる。ほぼまっすぐのび、SD12やSD14とほぼ平行する。幅は0.14～0.73m、検出面からの深さは2～34cm。溝底の標高は北西方向に緩やかに下がる。埋土は灰色～褐灰色土。出土遺物に土師器がある。

出土遺物 (第19図)

土師器

小皿 (85) 底部外面糸切り。体部は大きく外方に開く。

SD16 (第13図、図版8)

調査区の南側に位置し、中ほどから始まり南西方向にほぼまっすぐのびて調査区外にいたる。西側壁際で幅0.45mで検出面からの深さは7cm。北東は幅0.86mと広がるが、掘り方は判然としなくなる。埋土は黒褐色土。出土遺物には土師器があるが、小片のため図化できなかった。

SD19 (第13図)

調査区の西側に位置し、SD18とした大きな溝のまとまりから枝分かれする溝の一つである。SD22が最も新しく、平行するSD24を切る。幅は0.63m、検出面からの深さは24cm、溝底の標高は、緩やかに南東側へ下る。埋土は灰色土で、しまりあり固い。出土遺物には土師器がある。

出土遺物 (第21図)

土師器

椀 (106) 体部は丸くなる。高台は細く、外方にふんばる。

土師質土器

鉢 (107) 形状・傾きから鉢としたが、小片のためよく分からない。外面に煤が付着する。

SD20 (第13図)

調査区の西側に位置し、SD18とした大きな溝のまとまりから枝分かれする溝の一つである。SD27を切る。SD18から曲がった後、北西方向にまっすぐのびて調査区外にいたる。幅0.42～0.46m、検出面からの深さは28～38cm。溝底の標高は緩やかに南東側の下る。埋土は黒褐色土～暗褐色土。出土遺物には須恵器・土師器があるが、小片のため図化できなかった。

SD21 (第18図)

調査区の西側に位置し、SD18とした大きな溝のまとまりから枝分かれする溝の一つである。SD19・22の間にあり、SD01と切り合うが前後関係は分からない。幅1.00m、検出面からの深さは15～29cm、溝底の標高はあまり変わらない。出土遺物には須恵器・土師器・黒色土器があるが、小片のため図化できなかった。

SD24 (第18図、図版9)

調査区の西側に位置し、SD18とした大きな溝のまとまりから枝分かれする溝の一つである。平行するSD19に切られる。幅は0.35~0.40m、検出面からの深さは8~14cm、溝底の標高は緩やかに南東側を下る。出土遺物はなかった。

SD27 (第13図)

調査区の西側に位置し、SD17・23を切り、SD20・24に切られる。幅0.40~0.80m、検出面からの深さは9~16cm。溝底の深さはSD17にむかって緩やかに下る。埋土は黒褐色土。出土遺物には須恵器・土師器がある。

出土遺物 (第21図)

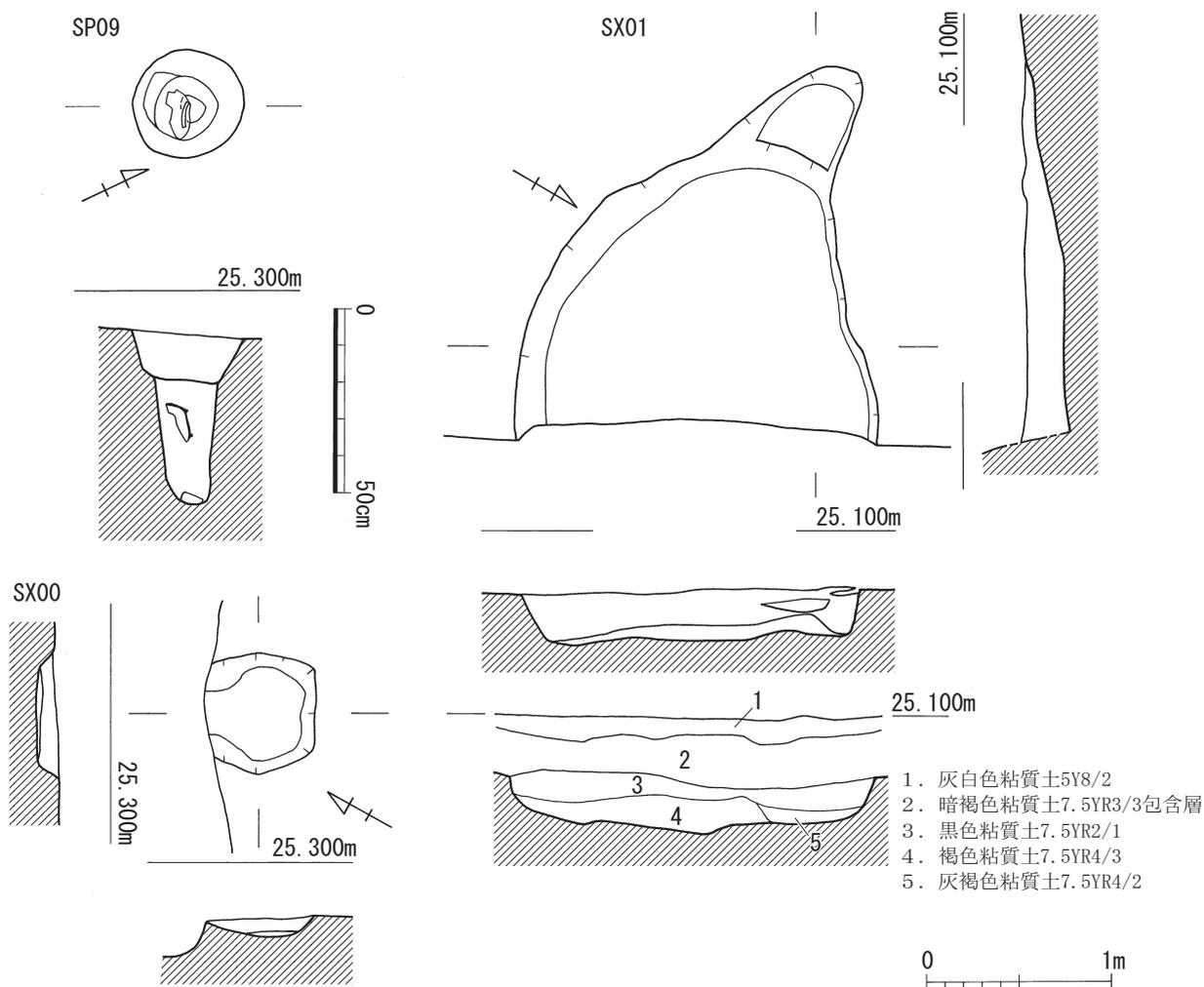
土師器

甕 (109) 口縁部だけの小片。大きく外反し、端部を丸くおさめる。

B. ピット

SP09 (第22図)

調査区の北側に位置し、SD08に近接する。径30cmのほぼ円形プランを呈するピットで、検出面



第22図 御供田遺跡第4次調査 SP・SX 実測図 (S=1/20、S=1/40)

からの深さは46cm。建物を構成するものと考えられるが、調査区外にのびると考えられる。出土遺物には土師器・黒色土器があり、完形に近いものが上層から中層にかけておさめられていた。

出土遺物（第21図、図版10・20）

土師器

椀（110） 体部は丸く、浅い。中島分類土師器・椀Ⅲ形式にあたる^{（註3）}。

黒色土器

椀（111・112） いずれもA類。111は体部は丸く、高台は細く高い。112は体部は深く丸い。

SP17（第13図）

調査区の北側に位置する。径35～40cmの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは20cm。建物を構成する可能性はあるが、周辺に同様のピットは見当たらない。出土遺物には、土師器がある。

出土遺物（第21図）

土師器

椀（113） 口縁部のみの小片。体部は丸くなる。

C. 土坑

SX00（第22図）

調査区の南東側に位置し、SD02に切られる。長辺0.67m、短辺0.60mの略方形プランを呈し、検出面からの深さは9cm。周壁は大きくひらく。出土遺物には黒色土器がある。

出土遺物（第21図、図版20）

土師器

不明（114） 二辺が生きているが、小片のため全形が不明である。

SX01（第22図、図版11）

調査区の南東側に位置する。長辺2.05m以上、短辺1.95mの不整形プランを呈し、東側は段を降りるように二段掘りになる。検出面からの深さは29cm。底面は浅い皿形を呈する。埋土は黒色～褐色土。出土遺物には土師器があるが、小片のため図化できなかった。

D. カクラン・検出面

調査区内はいわゆるカクランが多く見られた。カクランからは須恵器をはじめ、陶磁器や瓦など新しい時期の遺物が多く出土した。その中には、3次調査地と同様に、米軍が持ち込んだと考えられるものがあった。昭和37年に発行された住宅地図を見ると、4次調査地には外人ハウスと表記される建物が書かれていることから、その解体に伴うものと考えられる。このことから、カクラン出土遺物については米軍関係などと考えられる遺物について取り上げて図化・資料化をおこなった。

カクラン・検出面出土遺物（第21図、図版20・21）

須恵器

壺（115） 底部の小片。底部外面から体部にかけて回転ヘラ削りを施す。

磁器

猪口 (116) 外面に山水図らしきものが書かれる。高台内に「波2」と書かれる統制磁器である。

鉢 (117) 第3次調査地でも同様の米国産のものがあることから鉢とした。

ガラス製品

カップ (118) アメリカコーニング社製で、第2次世界大戦中から生産されたものである。

石器

石鏃 (119) 安山岩製である。先端部と基部が欠損しており、風化も進んでいる。

(3) 小結

ここで、第4次調査の遺構変遷について整理をおこなう。縄文時代の遺構はないが、石鏃の出土より狩猟活動が行われていたと考えられる。奈良時代の遺構としては、8世紀後半から末ごろの遺物がSD10・17から比較的まとまって出土し、活動が確認できるが明確な遺構は確認できない。平安時代以降については、SP09出土の土師器・黒色土器は10世紀末頃に地鎮のために納められたものと考えられ、中世集落の端緒と考えられる。これと関連する時期のものとして、SD04・18・19は10～12世紀前半に掘られた一連の溝と考えられ、SD18につながるSD12も同様と考えられる。SD08・09、SP17も同じく10～12世紀前半の幅で考えられる。また、調査区を直角にのびるSD06・10・17も10世紀ごろに開削され、最終的な埋没は11世紀後半～12世紀前半ごろと考えられる。また、この溝に接続するSD07は13～14世紀の遺物も含むが、同時併存すると考えられる。SD06に斜行してのびるSD15については14世紀以降で、平行するSD14も合わせて時期が異なるようである。太平洋戦争後のものとしては、カクラン出土の遺物から調査地周辺に米軍ハウスがあったことが確認でき、その由来がうかがえる。

3. 第6次調査

(1) 調査概要

御供田遺跡第6次調査地は、大野城市白木原1丁目309-1～5他に所在する。事業対象面積1600㎡全体を対象として調査を行った。調査は東半部をA区、西半部をB区として実施した。

試掘調査は平成18年11月14日に実施し、溝・ピット・土坑を確認した。遺物は確認されなかったが、西側に隣接する第4次調査地と同時代のものと考えて調査を実施することとなった。

調査の結果、大きな削平を受けていたものの溝・ピット・土坑が確認された。溝は調査区内を北東から南西方向に横断するものと、北西から南東方向にのびるものがある。これらの溝は、隣接する第1・4次調査地からのびることが確認され、その性格については後述したい。また、調査地のほぼ全面にピットが分布し、集中する部分もあるが、掘立柱建物を明確に確認することはできなかった。しかし、ピットの中には黒色土器を埋納したものがあり、周辺に集落が展開していることは間違いない。土坑には、楕円形プランをとり、袋状で深いものがある。調査中には、地山から水が染み出してくることが確認されており、井戸の可能性も指摘できる。

第6次調査では集落の内外を分ける溝が確認されたが、遺構・遺物については希薄であることから集落の縁辺部にあたると考えられた。

(2) 遺構と遺物

A. 溝

SD01・06 (第23図、図版14)

調査区の北側に位置する。SD01は調査区外から南西方向にのびた後、角度を変えて南東にのびる。SD02に切られる部分から南側をSD06とした。幅0.39～1.05m、検出面からの深さは3～11cm。溝底の標高は屈曲部あたりから、北東と南東に向かって緩やかに下る。出土遺物には土師器があるが、小片のため図化できなかった。

SD01出土遺物 (第25図)

土師器

小皿(120) 糸切り。小片であり、全形は不明である。

SD02・03 (第23・24図)

調査区の北側に位置する。調査区をおおむね東西方向に緩く蛇行しながら調査区外にいたる。SD01・13・14を切る。SD01と切り合う部分で他の遺構と切り合うことが確認され、その部分をSD03とした。SD02は0.57～1.10m、検出面からの深さは10～28cm。溝底の標高は西側が高く、一段下って東側が低くなる。SD03は長さ4.50m、幅1.50mの部分がSD02の周りに浅く広がる。検出面からの深さは3～5cmでほぼ平坦である。埋土は、SD02は黄灰色粘質土、SD03は黒褐色～褐灰色粘質土である。出土遺物はSD02から土師器が出土したが、SD03からの出土遺物はなかった。

SD02出土遺物 (第25図)

土師器



第23図 御供田遺跡第6次調査遺構配置図 (S=1/200)

小皿(121) 糸切り。小片のため全形は不明である。

SD04 (第24図、図版14)

調査区の北側に位置する。調査区外から南西にのびた後、やや西側に向きを変えて調査区外にいたる。SD14に切られ、SD17を切る。幅0.45~0.62m、検出面からの深さは8~26cm。溝底の標高は北東方向に緩やかに下る。埋土は黒褐色~褐灰色土。出土遺物には、土師器・瓦質土器がある。

SD04出土遺物 (第25図)

瓦質土器

播鉢(122) 内面に4本一組の播目がつき、片口になるようである。山村分類鉢A4類^(註4)。

SD05 (第24図、図版14)

調査区の北側に位置する。SD04と平行し、SD04に切られて終わる。幅0.33~0.53m、検出面からの深さ7~16cm。溝底の標高はほぼ同じである。埋土は黒褐色土。出土遺物には須恵器・土師器・肥前系染付があるが、図化できるものはなかった。

SD07 (第23図、図版14)

調査区の東側に位置する。東側壁近くから始まり、略南西方向にのびた後、SD08に切られる。幅0.40~0.75m、検出面からの深さは2~8cm。溝底の標高は北東方向に向かって緩やかに下る。埋土は灰褐色土。出土遺物には、土師器・石器がある。

SD07出土遺物 (第25図、図版21)

石器

石鏃(123) 黒曜石製の小型のものである。基部の抉りは深い。先端を欠失している。

SD08 (第24図、図版14)

調査区の東側に位置する。調査区外から南西方向にのび、調査区の中ほどで終わる。SD07を切り、SD09に切られる。幅0.28~0.46m、検出面からの深さは3~9cm。溝底の標高はほぼ同じである。埋土は灰黄褐色土。出土遺物には、土師器・黒色土器があるが、小片のため図化できなかった。SD10・11とほぼ同じ方向にのびており、一連のものと考えられる。

SD09 (第24図、図版14)

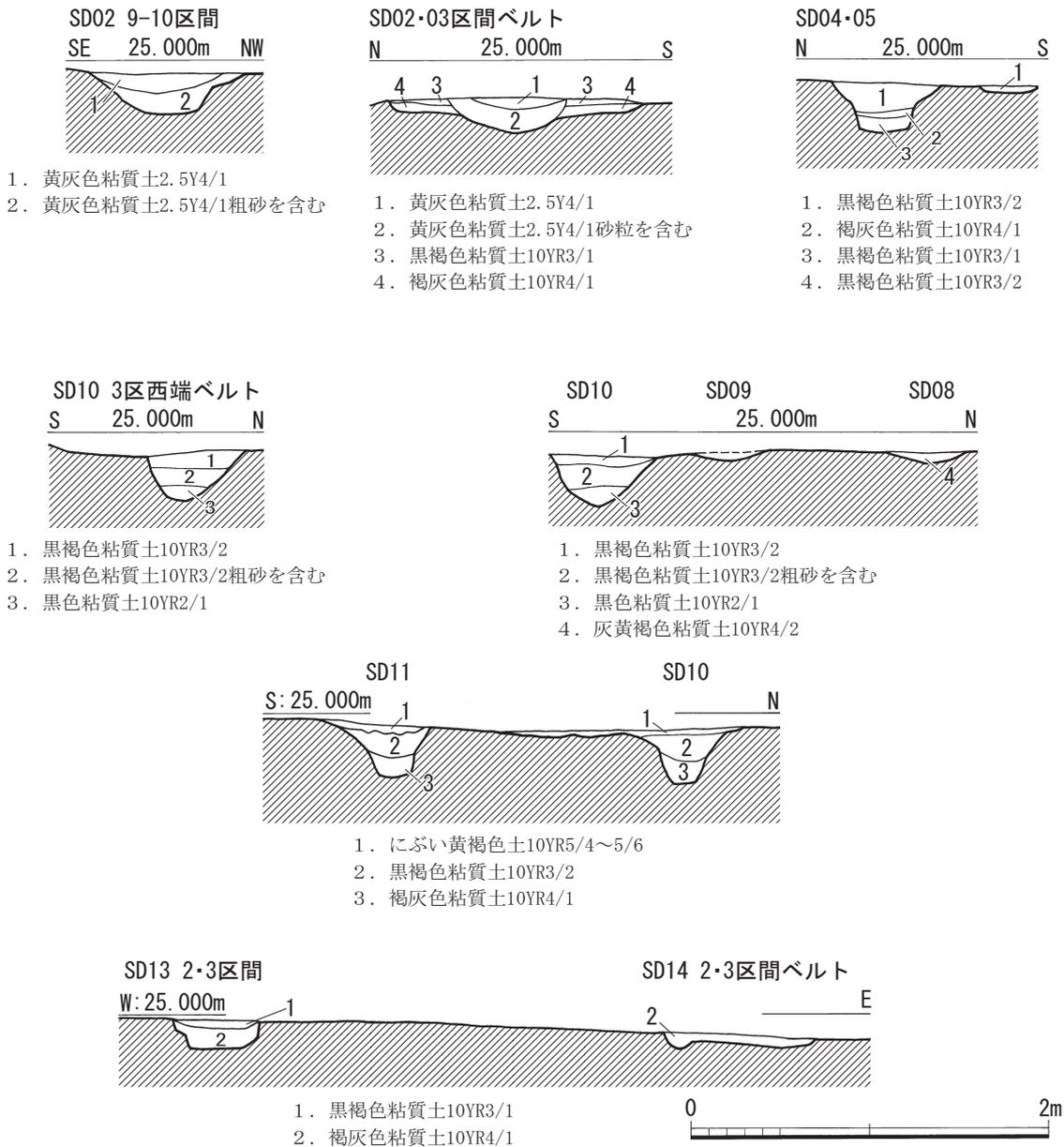
調査区の南東側に位置する。SD10に切られ、SD08を切った後、大きくのびることなく終わる。幅は0.34~0.45m、検出面からの深さは3~8cm。溝底の標高はほぼ同じである。出土遺物には土師器があるが、小片のため図化できなかった。

SD10 (第24図、図版14・15)

調査区の南東側に位置する。調査区外から緩やかに蛇行しながら南西にのび、調査区外へいたる。SD11にはほぼ平行し、SD09・26を切る。幅は0.36~0.96m、検出面からの深さは25~40cm。溝底の標高は緩やかに北東方向に下る。埋土は黒褐色~黒色粘質土で粘性が強い。出土遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・黒曜石チップがある。溝ののびる方向より、第4次調査地のSD06・17・10につながるのではないかと考えられる。

出土遺物 (第25図)

須恵器



第24図 御供田遺跡第6次調査 SD 土層実測図 (S=1/40)

杯身 (124) 断面方形の低い高台を有する。器壁が厚く、大型の盤になるかもしれない。

土師器

杯 (125・126) 125は底部外面糸切り。126は口縁端部付近に沈線を1条巡らせる。

丸底杯 (127) 杯部は浅くなることから丸底杯とした。端部は丸くおさめる。

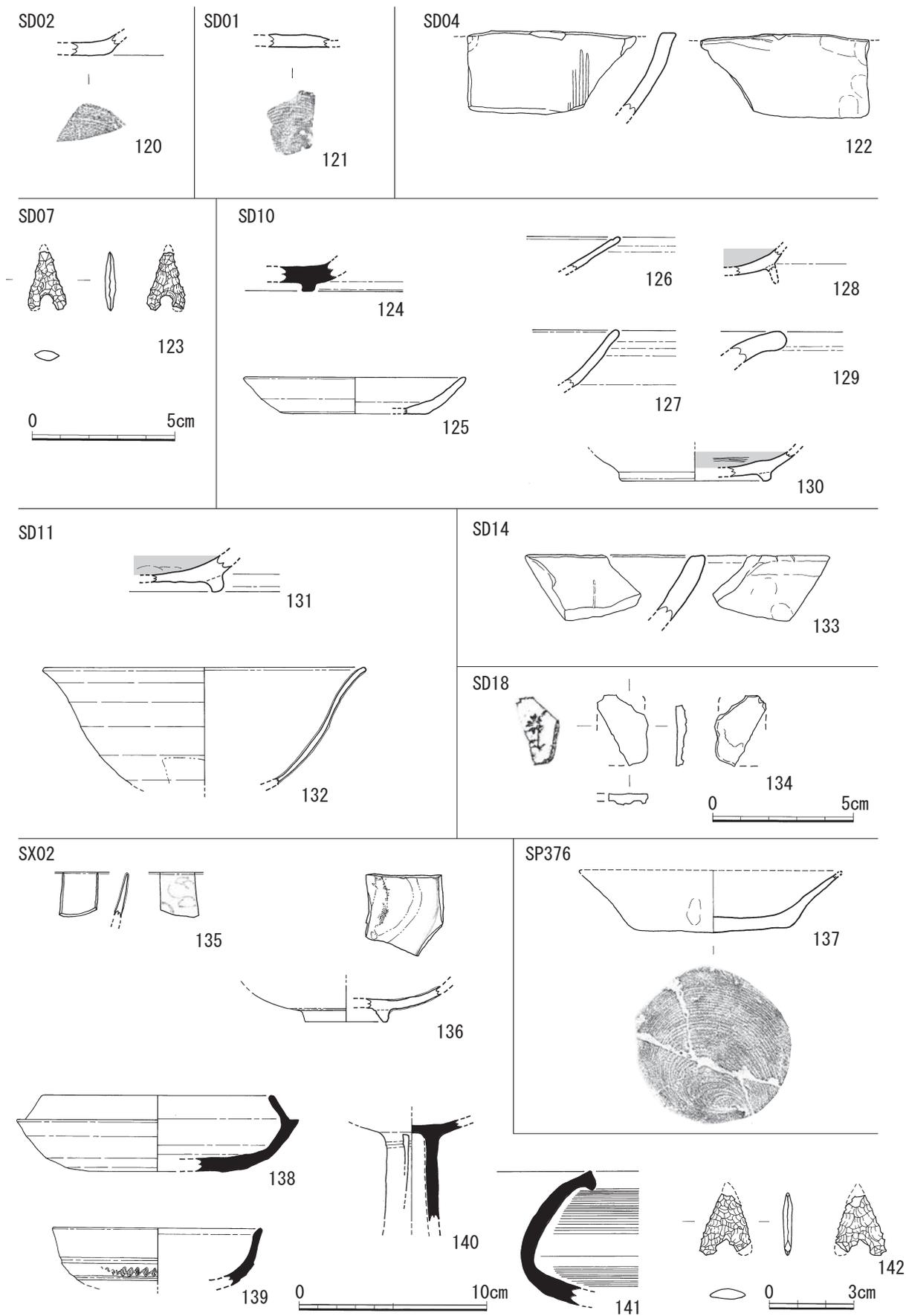
甕 (129) 口縁部のみ的小片。外方に大きくひらき、端部を丸くおさめる。

黒色土器

椀 (128・130) いずれもA類、高台部のみ的小片。体部は丸く、130の高台は低い。

SD11 (第24図、図版15)

調査区の南東側に位置する。調査区外から南東側に緩やかに蛇行しながらのび、調査区外にいたる。SD10と平行し、溝間の幅は0.8~1.4mである。溝の幅は0.52~0.97m、検出面からの深さは21



第25図 御供田遺跡第6次調査出土遺物実測図 (123・134・142は S=1/2、他は S=1/3)

～32cm。溝底の深さは北東に向かって緩やかに下る。埋土は黒褐色～褐灰色粘質土である。出土遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・磁器がある。溝ののびる方向より、第4次調査地のSD02～05のいずれかにつながるのではないかと考えられる。

出土遺物 (第25図)

黒色土器

椀 (131) 体部は丸く、高台は低く外方にふんばる。

磁器

椀 (132) 白磁。体部は丸く、緩く大きく外方に開く。大宰府編年白磁椀IX2a類^(註1)。

SD12・13 (第23・24図)

調査区の中央部に位置する。調査区外から南東側にまっすぐのびる。SD02に切られる。途中でカクランに切られるが一連の溝と考えられ、北側をSD13、南側をSD12とした。SD12は幅0.35～0.58m、検出面からの深さ1～8cm。SD13は幅0.30～0.79m、検出面からの深さ2～16cm。溝底の深さは、SD12は北西側に、SD13はSD02と交わるあたりが最も高くなる。SD13の埋土は黒褐色～褐灰色粘質土。出土遺物には、SD13から土師器が出土しているが、小片のため図化できなかった。溝ののびる方向より、御供田遺跡第1次調査地のSD401につながるものと考えられる。

SD14・16 (第23・24図)

調査区の西側に位置する。SD13に平行するが、調査区中ほどから南側は確認できない。SD02・18に切れ、SD04を切る。幅0.67～1.07m、検出面からの深さ2～10cm。幅広の溝であるが底面に幅の狭い溝SD16が確認でき、こうした幅の狭い溝が掘り重ねられて最終的に幅の広い溝に見えるのではなかろうか。埋土は褐灰色粘質土。出土遺物には、土師器・陶器がある。

SD14出土遺物 (第25図)

瓦質土器

播鉢 (133) 端部は水平になる。内面に一条播目が見える。山村分類鉢A4類^(註4)。

SD15 (第23図)

調査区の西側に位置する。SD14に切れ、周辺の土坑にも切られる。幅0.67～0.80m、検出面からの深さ6～8cm。底面の標高はほぼ変わらない。出土遺物はなかった。

SD17 (第23図)

調査区の北西側に位置する。調査区外から南東側に3mほどのびるが、SD04・18に切られる。幅0.32～0.95m、検出面からの深さは5～14cm。底面の標高はSD18にむかって下がっており、ある時期併存した可能性が高い。出土遺物には土師器があるが、小片のため図化できなかった。

SD18 (第23図)

調査区の北西側壁際に位置する。SD04・13・17を切り、北東から南西方向にのびると考えられる。確認できる幅は0.3m、検出面からの深さは19～37cm。出土遺物には陶磁器・土製品がある。

出土遺物 (第25図)

土製品

不明 (134) 白色でタイル状の土製品。中央には草花文が陽刻される。

B. ピット

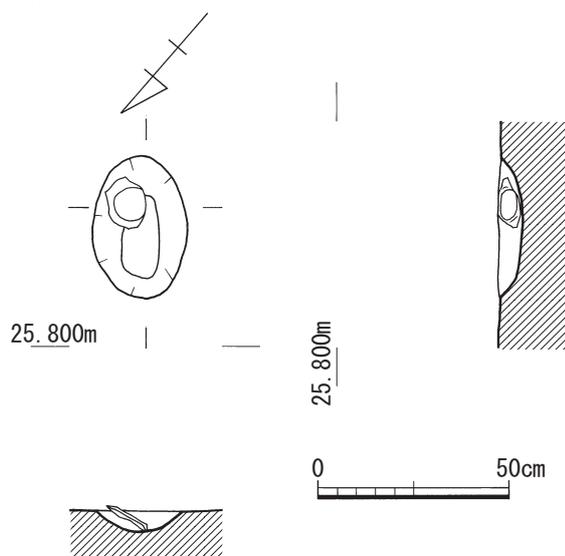
SP376 (第26図、図版15)

調査区の南西側に位置する。長辺0.37m、短辺0.25mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは6cmで、建物を構成するようなものではない。土師器杯が伏せられた状態で出土した。

出土遺物 (第25図、図版21)

土師器

杯 (137) 復元口径13.8cmである。底部外面糸切り。内面はススがつき、灯明具と考えられる。

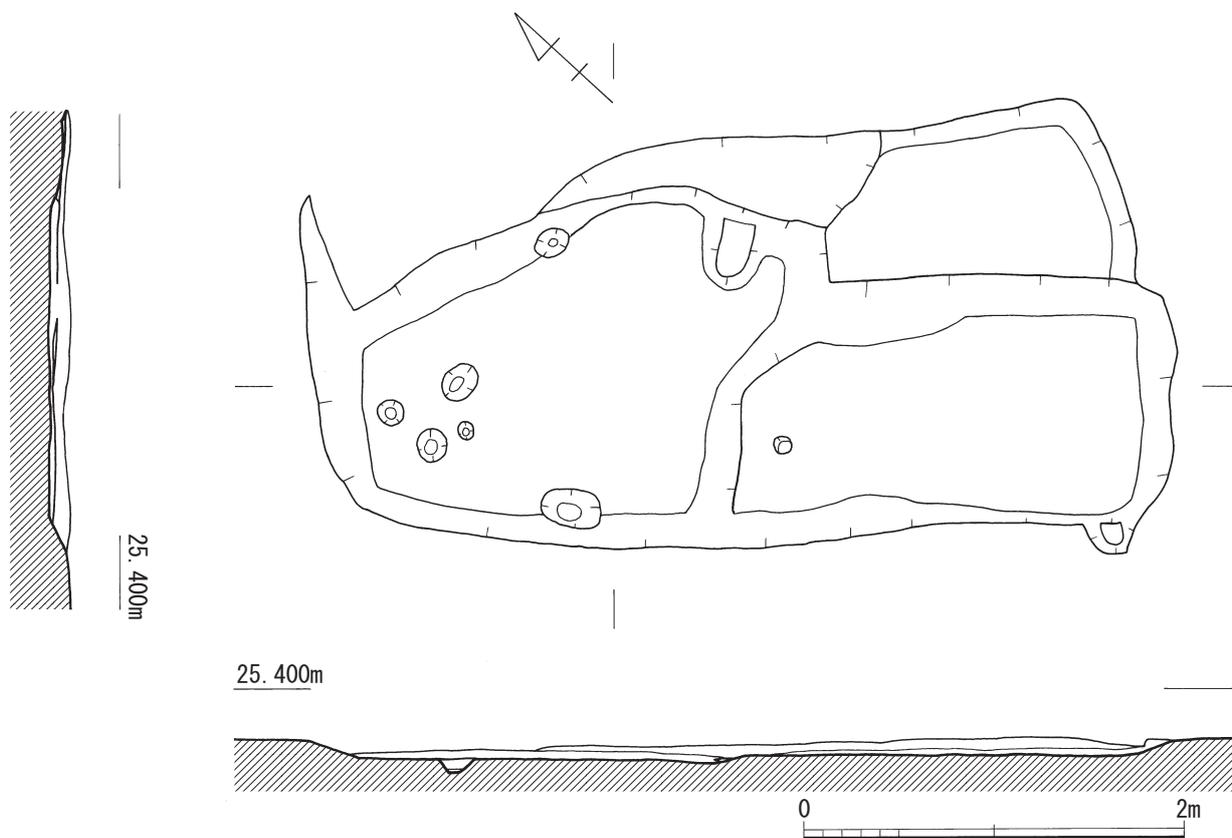


第26図 御供田遺跡第6次調査 SP376実測図 (S=1/20)

C. 土坑

SX02 (第27図、図版15)

調査区の南西側に位置する。検出時に、長辺4.50m、短辺2.18mの長方形に遺構が広がることを確認し、当初は住居跡の可能性も考えたが、調査の結果、浅い落ち込みとなり、性格を明らかにすることはできなかった。出土遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・陶磁器がある。



第27図 御供田遺跡第6次調査 SX02実測図 (S=1/40)

出土遺物（第25図）

磁器

椀（135） 染付。草花文を外面に施す。

皿（136） 染付。内外面一部露胎。内面に圏線が1条見える。内面見込みと高台に砂目が付着する。

D. 造成時搬入遺物など

第3・4次調査地ではカクランから米軍板付基地に関連すると考えられる遺物が出土したが、第6次調査地ではそうした遺物は確認できなかった。その一方で、古墳時代の須恵器が表採された。この時期の遺構は、御供田遺跡や近接する後原遺跡では確認されていない。その由来について、寄贈資料に下大利地区で住宅造成時に運び込まれた土砂に混じっていた須恵器や瓦がある。このことを考慮して遺物の観察を行うと、第6次調査地出土須恵器には自然釉がついており、窯跡出土の資料と類似している。このことから、第6次調査地で表採された古墳時代須恵器は造成時の土砂に含まれていた可能性が高いと考えられ、採土地が牛頸地区周辺ではないかと考えられるが定かではない。こうしたことも踏まえ、造成時に持ち込まれた遺物も取り上げて図化・資料化をおこなった。

造成時搬入遺物等（第25図、図版21）

須恵器

杯身（138） 立ち上がりは高く内傾する。底部外面全面に自然釉が付着する。

高杯（139・140） 139は杯部が浅く、外面に波状文を施す。140は長脚で三方スカシを有する。

甕（141） 口縁部は大きく外反し、端部は鳥嘴状につくる。外面に自然釉がつく。

石器

石鏃（142） 黒曜石製。基部の抉りは深く、精微である。先端部と基部を欠失する。

（3）小結

ここで、第6次調査の遺構変遷について整理をおこなう。縄文時代の遺構はないが、石鏃の出土より狩猟活動が行われていたと考えられる。古墳時代の遺物については、おおむね6世紀中頃のもので、戦後宅地化する際の造成土に含まれていた可能性が高い。奈良時代の遺構は確認できないが、8世紀後半の遺物があり周辺で何らかの活動があったことがうかがえる。平安時代以降になると、SD10は11世紀中頃以降の年代が考えられ、埋没は13世紀前半。SD11も11～12世紀を中心とし、13世紀中頃～14世紀前半の埋没と考えられ、同時併存する。SD01・02も12世紀から14世紀ごろと考えられるが、遺物が少なく時期が確定できない。SP376は13世紀末～14世紀中頃の地鎮具と考えられ、周辺に集落の展開が考えられるが様相は明らかではない。SD04・14は15～16世紀ごろか。SX02は136に砂目が付着することから17世紀ごろのものと考えられる。

註4 山村信榮「太宰府出土の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究VI』日本中世土器研究会

第1表 第3次調査出土遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)		形態・技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
				①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)(残存値)				
1	土師器	椀	SD02	②(1.6) ④(6.1)		内外面ナデ	A：微細～1mm程の白色砂粒を含む B：良好 C：灰色10YR 8/2	
2	須恵器	杯か?	SD03 cベルト～dベ ルト間	②(2.1)		底部外面ナデ 底部内面不定方 向ナデ 体部内外面回転ナデ	A：1～3mmの白色砂粒及び微細～ 2.5mmの黒色砂粒を含む B：良好 C：灰白色2.5Y 7/1	
3	土師器	杯	SD03 cベルト～dベ ルト間	②(1.1) ③(11.0)		底部外面糸切り 後不定方向ナデ 内面不定方向ナデ 体部外面回 転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A：1mm以下の白色砂粒・赤褐色砂 粒・雲母を含む B：良好 C：内面 にぶい黄橙色10YR 7/1 外面にぶい 黄橙色10YR 7/1～褐灰色10YR 5/1	
4	土師器	椀	SD03 bベルト第3層	②(2.1)		内外面回転ナデ	A：微細な白色砂粒を含む雲母含む B：良好 C：内面浅黄橙色10YR 8/3 外面にぶい黄橙色10YR 7/3	外面煤付着
5	土師器	甕	SD03 カクラン～cベ ルト間	②(3.4)		体部内面ケズリ 口縁部内外面 ヨコナデ 口縁部内面上端～外 面煤付着	A：0.5～3mmの砂粒・長石を含む B：良好 C：にぶい黄橙色10YR 7/3	
6	弥生土器	甕	SD03 cベルト～dベ ルト間	②(2.3) ③(7.2)		内外面調整不明	A：0.5～3mmの砂粒・長石類を含む B：良好 C：内面灰白色10YR 8/1 外面にぶい黄橙色10YR 7/2～7/4	
7	黒色土器	椀	SD03 bベルト～カク ラン間1層	②(2.6)		外面回転ナデ 内面ヨコ方向の ミガキ	A：細かい砂粒・雲母含む B：良 好 C：内面黒色10YR 1.7/1 外面 浅黄橙色10YR 8/4	黒色土器A類 外面煤付着
8	黒色土器	椀	SD03 aベルト西	②(2.0) ④(7.0)		高台部内面ナデ 他はミガキ	A：微細～3mm程の白色砂粒を含む B：良好 C：黒色10YR 1.7/1	黒色土器B類
9	瓦質土器	鉢?	SD03 ベルトa-b間	残存長3.4		外面タタキ	A：微細～2mm程の白色砂粒を含む B：良好 C：内面褐灰色10YR 4/1 外面灰黄褐色10YR 6/2	
10	瓦	平瓦	SD03 ベルトa-b間	残存長6.7 最大幅5.9 厚さ1.8			A：3mm以下の長石類を多く含む B：やや不良 C：褐灰色10YR 6/1	
11	瓦	平瓦	SD03 カクラン～cベ ルト間	残存長7.9 最大幅8.4 厚さ1.8		凸面格子目タタキ 凹面布目圧 痕	A：2～3mmの白色・黒色砂粒・微 細～3mmの長石類を多く含む B： 良好 C：凸面灰白色10YR 8/1 凹 面明褐灰色7.5YR 7/1	
12	土製品	棒状土 製品	SD03 ベルトa-b間	残存長3.9 残存幅3.2		ナデ	A：微細～4mm程の白色砂粒を含む B：良好 C：浅黄橙色10YR 8/3	
13	土製品	棒状土 製品	SD03 ベルトa-b間	残存長3.5 残存幅4.2		ナデ	A：微細～5mm程の白色砂粒を含む B：良好 C：浅黄橙色10YR 8/3	
14	黒色土器	椀	SP11	②(3.1)		内面不定方向ミガキ 外面ナデ	A：0.5mmの白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内面黒色10YR 1.7/1 外面黄橙色10YR 8/6	黒色土器A類
15	瓦	丸瓦	SP12	残存長9.1 最大幅8.0 厚さ2.0		凹面布目圧痕	A：微細～3mmの長石類を多く含む B：やや不良 C：凸面浅黄橙色 10YR 8/3～橙色2.5YR 7/6 凹面灰 白色10YR 8/2	凸面二次被熱か
16	須恵器	杯身	SX02ベルト内	②(3.1)		内外面回転ナデ	A：白色砂粒を含む B：良好 C：内面灰白色5Y 7/1 外面灰色5Y 4/1	
17	土師器	椀	SX02ベルト内	②(3.8) ④(5.2)		調整不明	A：微細な砂粒を含む B：良好 C：浅黄橙色10YR 8/3	
18	土師器	小皿	SX02北東	②(0.75) ③(7.0)		内面回転ナデ 体部外面回転ナ デ 底部外面ヘラ切り	A：微細～2mmの白色砂粒・雲母を 含む B：良好 C：浅黄橙色10YR 8/3	
19	土師器	小皿	SX02北西	②(0.65) ③(7.8)		体部内外面ナデ 底部外面ヘラ 切り 板状圧痕あり	A：微細な砂粒・雲母を少量含む B：良好 C：浅黄橙色10YR 8/4	
20	土師器	丸底杯	SX02ベルト内	②(2.9)		内外面回転ナデ	A：微細な砂粒・雲母を含む B：やや良好 C：内面灰白色10YR 8/2 外面浅黄橙色10YR 8/4	
21	黒色土器	椀	SX02北東	②(1.5)		高台部外面回転ナデ 内面ミガ キ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内面黒色7.5YR 2/1 外面にぶい褐色7.5YR 6/3	黒色土器A類
22	黒色土器	椀	SX02ベルト内	②(2.05)		内面ミガキ 外面回転ナデ	A：2mm以下の白色・赤褐色砂粒を 含む B：良好 C：黒褐色5YR 2/1	黒色土器B類
23	土師器	椀	SX04	②(0.7) ④(5.8)		内外面回転ナデ	A：微細～2mmの白色砂粒を多く 含む B：良好 C：浅黄橙色10YR 8/3	
24	須恵器	杯蓋	SX06	②(1.5) つまみ径2.9		内外面調整不明	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：橙色5YR 6/6	
25	青磁	皿	SX06	②(2.0)		内外面施釉	A：精良 B：良好 C：釉にぶい 黄色2.5Y 6/3 胎土にぶい黄褐色 10YR 7/2	龍泉窯系皿I類
26	陶器	壺	SX06	②(2.7)		内面回転ナデ 内面上端～外面 施釉 内面露胎	A：精良 B：良好 C：釉淡黄色2.5 Y 8/3 胎土灰白色2.5Y 8/2	

第2表 第3次調査出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)	形態・技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
				①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)〈残存値〉			
27	弥生土器	甕	SX06	②<14>	外面ナデか 他は磨滅により調整不明	A：2mm以下の砂粒・長石類・雲母を含む B：良好 C：内面にぶい橙色7.5YR 7/4 外面にぶい橙色7.5YR 7/4～橙色5YR 6/8	
28	土師器	杯	SX07	②<1.2> ③(9.0)	底部外面へラ切り 底部内面不定方向ナデ 体部内外面回転ナデ	A：微細な砂粒・0.5mmの砂粒・雲母を含む B：良好 C：内面にぶい赤褐色2.5YR 4/3 外面明赤褐色2.5YR 5/6	
29	土師器	杯	SX16	①(11.2) ②2.5 ③6.7	底部外面へラ切り 他は回転ナデ	A：微細な白・黒色砂粒・長石を含む B：良好 C：浅黄橙色10YR 8/3	底部外面一部煤付着
30	磁器	蓋	SE01	①10.9 ②3.4 受部 径11.75 つまみ径1.9	受部露胎 他は施釉 外面赤絵	A：精良 B：良好 C：胎土乳白色	31とセット
31	磁器	深皿	SE01	①11.3 ②5.25 ④5.3	口縁端部と高台端部露胎 他は施釉 体部外面赤絵を施す	A：精良 B：良好 C：胎土乳白色	30とセット
32	磁器	マグカップ	SE01	①9.2 ②8.2 ③7.6	体部外面施釉	A：精良 B：良好 C：アイボリーホワイト色	側面と底部に印字あり
33	磁器	碇子	SE01	②4.3 上端径3.0 下端径3.2	底部露胎 他は施釉	A：精良 B：良好 C：釉灰白色7.5YR 8/1 露胎灰白5Y 8/1	
34	磁器	碇子	SE01	②10.2 ③4.75 ⑤10.8	底部端部露胎 内外面施釉	A：精良 B：良好 C：釉 暗赤褐色5YR3/6 胎土灰白色N8/ 露胎にぶい黄橙色10YR 7/2	
35	ガラス製品	広口瓶	SE01	①3.9 ②5.0 ③4.4 ⑤4.65	ガラス内に気泡が入る	C：濃茶色	
36	ガラス製品	広口瓶	SE01	①3.8 ②5.3 ③4.35 ⑤4.55	ガラス内に気泡が入る	C：濃茶色	
37	ガラス製品	広口瓶	SE01	②<10.3> ③4.5 ⑤5.55	鉄製の蓋がつく ガラス内に気泡が入る	C：透明色	
38	ガラス製品	化粧品瓶	SE01	①1.6 ②9.85 ③5.8	ガラス内に気泡が入る	C：乳白色	「TELLME 80C. C.」の浮き文字
39	ガラス製品	香水瓶	SE01	①0.75 ②9.5 ③4.0 ⑤5.0	ガラス内に気泡が入る	C：透明色	
40	ガラス製品	入浴剤瓶	SE01	①2.5 ②17.25 ③6.9 ⑤7.0	ガラス内に気泡が入る	C：エメラルドグリーン色	「六一〇ハップ」の浮き文字
41	ガラス製品	薬瓶	SE01	①2.0 ②8.2 最大幅3.8	ガラス内に気泡が入る	C：コバルトブルー色	
42	ガラス製品	両口式点眼瓶	SE01	上端径1.6 下端径 0.55 全長8.45 最大 幅2.7	ガラス内に気泡が入る	C：コバルトブルー色	
43	ガラス製品	瓶	SE01	①2.6 ②25.7 ③7.6	ガラス内に気泡が入らず、精緻である	C：透明色	側面と底部に浮き文字あり
44	ガラス製品	瓶	SE01	①3.1 ②38.9 ③10.2 ⑤10.8	ガラス内に気泡が入る	C：緑がかった透明色	
45	ガラス製品	白熱電球	SE01	①1.65 ⑤5.95 残存長10.35			「トウ100V 60W」の印字
46	ガラス製品	白熱電球	SE01	①1.6 ⑤5.95 残存長9.9			「マツダ100V 60W」の印字
47	ガラス製品	白熱電球	SE01	⑤6.8 残存長13.5			「マツダ100V 100W」の印字
48	ガラス製品	白熱電球	SE01	①2.3 ⑤6.75 残存長12.8	全体煤付着		「マツダ100V 100W」の印字
49	不明	電気部品?	SE01	②5.95 ③2.8 ⑤2.75			液漏れか? 白い粉が付着
50	須恵器	杯身	壁掃除	②<2.4> ④(5.6)	底部外面へラ切り後ナデ 内面回転ナデ後不定方向ナデ 体部内外面回転ナデ	A：微細～1mmの白色・黒色砂粒を含む B：良好 C：内面褐色7.5YR 6/1 外面褐色10YR 5/1	高台部歪みあり
51	磁器	染付椀	カクラン06	②<3.8>	内外面施釉 外面菊花を描く	A：精良 B：良好 C：釉青味を帯びた透明釉 胎土灰白N8/	
52	青磁	椀	カクラン03	②<4.5> ④(6.7)	内外面施釉 外面唐草文	A：精良 B：良好 C：釉明オリープ灰色2.5GY 7/1 胎土灰白5Y 7/2	
53	磁器	染付小皿	カクラン26	①13.2 ②2.7 ④6.0	内外面施釉 内面染付 高台部端部露胎	A：精良 B：良好 C：釉明緑灰色10GY 8/1 胎土灰白N8/	
54	磁器	カップ	カクラン24	①9.8 ②9.2 ③6.6	内外面施釉 底部一部露胎	A：精良 B：良好 C：胎土乳白色 釉透明	底部に印字あり
55	磁器	洋皿	カクラン05	②<2.7>	内外面施釉 高台部端部露胎	A：精良 B：良好 C：釉灰白N8/ 胎土灰白N8/	
56	磁器	染付鉢	カクラン26	①18.4 ②6.75 ④9.3	内外面施釉 内面染付 高台部端部露胎	A：精良 B：良好 C：釉青味を帯びた透明釉 胎土灰白N8/	
57	ガラス製品	整髪料入れ	カクラン20	①4.9 ②3.8 ③6.5		C：乳白色	「メスマ」の浮き文字
58	陶器	整髪料入れ	カクラン06	①6.2 ②3.8 ③7.0		C：白色	底部に浮き文字あり

第3表 第4次調査出土遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)〈残存値〉			
59	土師器	椀	SD04	②<2.2> ③<8.8>	外面回転ナデ 内面磨滅により調整不明	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内面にぶい橙色7.5YR 7/4 外面橙色5YR 6/6	
60	土師器	丸底杯	SD04	②<2.7> ③<10.0>	底部外面へラ切り 底部内面指頭圧痕 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:浅黄橙色10YR 8/3	口縁内面煤付着
61	瓦	平瓦	SD04	残存長6.1 最大幅12.0 厚さ2.4	凹凸面磨滅により調整不明	A:微細~2mmの白色砂粒を含む B:不良 C:凹面灰白色2.5Y 8/1~灰色N5/ 凸面灰白色2.5Y 8/2~灰白色N7/	
62	土師器	小皿	SD07a 東端	②<0.6> ③<6.0>	底部外面糸切り 内面中央指頭圧痕あり 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内面にぶい黄橙色10YR 7/3 外面にぶい黄橙色10YR 7/4	
63	黒色土器	椀	SD08	②<1.75> ③<7.0>	外面回転ナデ 内面磨滅により調整不明	A:微細~3mmの白色砂粒を含む B:良好 C:内面灰黄褐色10YR 6/2 外面にぶい黄橙色10YR 7/3	黒色土器A類
64	土師器	椀	SD09	②<1.95>	外面回転ナデ 内面不定方向ナデ	A:微細~3mmの白色砂粒を含む B:良好 C:浅黄橙色10YR 8/4	
65	土師器	杯	SD09	①<11.6> ②<3.1> ③<6.3>	底部外面へラ切り 他は回転ナデ	A:微細~2mmの砂粒を含む B:良好 C:内面浅黄橙色10YR 8/4 外面にぶい橙色7.5YR 7/4	
66	土師器	丸底杯	SD09	①<14.4> ②<3.0>	底部外面磨滅により調整不明 底部内面回転ナデ後不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内面にぶい黄橙色10YR 7/2~褐色灰色10YR 5/1 外面にぶい黄橙色10YR 7/3	
67	土師器	丸底杯	SD09	②<1.7>	内外面ナデ 底部外面輪積み成形の痕跡あり	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:にぶい黄橙色10YR 7/2	
68	土製品	棒状土製品	SD09	残存長8.5 最大厚3.1		A:6mm以下の長石類を多く含む B:良好 C:灰白色10YR 8/2	
69	土製品	棒状土製品	SD09	残存長14.3 最大厚4.3		A:2~3mmの長石類を多く含む B:良好 C:浅黄橙色10YR 8/3	
70	須恵器	杯身	SD10上層	②<1.3>	内外面回転ナデ	A:微細な砂粒を多く含む B:良好 C:内面黄灰色2.5Y 6/1 外面黄灰色2.5Y 6/1~5/1	
71	須恵器	杯身	SD10下層	②<1.5>	底部外面へラ切り後ナデ 底部内面回転ナデ 体部外面下位工具痕?あり	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:灰N6/	
72	土師器	椀	SD10	②<3.3>	内外面回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内面にぶい黄橙色10YR 7/3~にぶい黄橙色10YR 6/4 外面にぶい黄橙色10YR7/3	
73	土師器	椀	SD10	②<3.0>	内外面回転ナデ	A:微細な黒色砂粒を含む B:良好 C:にぶい黄橙色10YR 7/4	
74	土師器	杯	SD10上層	①<12.8> ②<2.6> ③<9.2>	底部内面不定方向ナデ 口縁部内外面回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:微細な砂粒・雲母を含む B:やや良好 C:にぶい橙色7.5YR 7/4	
75	土師器	杯	SD10上層	①<13.0> ②<2.5> ③<8.8>	底部外面ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色・茶色砂粒、7mmの礫を含む B:良好 C:浅黄橙色7.5YR 8/4~にぶい橙色7.5YR 7/4	
76	土師器	杯	SD10上層	①<15.2> ②<2.5> ③<10.0>	底部外面磨滅により調整不明 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ 底部外面板状圧痕あり	A:微細な黒色砂粒を含む B:良好 C:にぶい橙色7.5YR 7/4	
77	土師器	椀	SD10下層	②<2.2> ③<6.4>	外面回転ナデ 内面調整不明	A:微細な砂粒・雲母を含む B:良好 C:にぶい黄橙色10YR 7/2	
78	黒色土器	椀	SD10下層	②<2.4>	外面回転ナデ 内面ミガキ 体部外面下位指オサエ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内面黒色10YR 2/1 外面にぶい黄橙色10YR 7/3	黒色土器A類
79	土師器	椀?	SD10上層	②<2.7>	内外面回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒・雲母を含む B:良好 C:浅黄橙色7.5YR 8/4~橙色7.5YR 7/6	外面煤付着
80	土師器	甕	SD10上層	②<5.65>	頸部外面ハケ目 頸部内面ナデ 他は回転ナデ	A:4mm以下の長石類・雲母を含む B:良好 C:内面にぶい黄橙色10YR 7/2~黒色10YR 1.7/1 外面にぶい黄橙色10YR 7/2	
81	陶器	椀?	SD10	②<2.0>	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉黄褐色2.5Y 5/3 胎土淡黄色2.5Y 8/2	
82	鉄製品	針金?	SD10	残存長3.95 幅1.15 厚さ1.35 重さ4g			
83	黒色土器	椀	SD12	②<1.1>	底部外面ナデ 底部内面ハケ目後ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内面黒色2.5Y 2/1 外面灰黄色2.5Y 7/2	黒色土器A類

第4表 第4次調査出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)〈残存値〉			
84	土師器	杯	SD13	②<1.0>	底部外面ヘラ切り 底部内面ミガキ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内面 橙色7.5YR 6/6 外面にぶい褐色7.5YR 5/4	
85	土師器	小皿	SD15	②<1.05> ③<5.0>	底部外面糸切り 底部内面回転ナデ後不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細～2mmの白色・黒色砂粒・雲母を含む B:やや軟質 C:内面 橙色5YR 6/6 外面灰褐色7.5Y 6/2	
86	須恵器	杯蓋	SD17 8区1層(黒色)	②<1.3>	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:灰白色7.5Y 7/1	
87	須恵器	杯身	SD17 2区1層(黒色)	②<1.4> ③<8.6>	外面回転ナデ 内面不定方向ナデ	A:微細～2mmの白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:黄灰色2.5YR 6/1	
88	須恵器	杯身	SD17 2区1層(黒色)	②<1.65> ④<8.4>	内外面回転ナデ	A:微細～1mmの白色・黒色砂粒を含む B:やや軟質 C:灰黄褐色10YR 6/2	
89	須恵器	皿	SD17 4区褐色土(1層)	①<18.0> ②<1.8> ③<14.4>	底部外面ヘラ切り後ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒・2mmの砂粒を含む B:良好 C:灰色N6/	
90	須恵器	壺	SD17 3区1層(赤褐色層)	①<11.0> ②<3.4>	内外面回転ナデ 内外面自然釉あり	A:微細～1mmの白色砂粒を含む B:良好 C:内面灰白色N7/～灰オリーブ色5Y 5/2 外面灰白色N7/～オリーブ黒色5Y 3/2	
91	須恵器	大甕	SD17 3区1層(褐色層)	②<5.8>	内外面回転ナデ 頸部外面2条の沈線が巡る	A:微細～2mmの白色砂粒を含む B:良好 C:灰色N4/	火ぶくれあり 自然釉あり
92	須恵器	大甕	SD17 3区1層(赤褐色層)	②<6.5>	内外面回転ナデ	A:微細～2mmの白色砂粒を含む B:良好 C:内面暗赤褐色2.5YR 3/2 外面赤褐色10R 4/4	
93	土師器	椀	SD17 3区3層(粘質)	②<1.6> ④<6.7>	内外面回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒・雲母を多く含む B:良好 C:内面にぶい 橙色7.5YR 7/4 外面橙色7.5YR 6/6	
94	黒色土器	椀	SD17 3区1層(赤褐色層)	②<2.3>	内外面回転ナデ	A:微細な砂粒・4mm以下の長石を含む B:良好 C:内面黄褐色10YR 5/8～褐色10YR 4/1 外面にぶい黄褐色10Y 7/3	黒色土器A類
95	黒色土器	椀	SD17 2区1層(黒色)	②<2.9>	内外面回転ナデ 体部外面下位指頭圧痕あり	A:微細な白色・黒色砂粒・石英を含む B:良好 C:内面にぶい黄褐色10YR 7/3～黒色10YR 1.7/1 外面にぶい黄褐色10YR 7/3	黒色土器A類
96	土師器	皿	SD17 5区1層	②<1.5>	内外面回転ナデ後回転ミガキ	A:微細な白色・黒色砂粒・2mmの長石を含む B:良好 C:橙色5YR 6/6	
97	土師器	皿	SD17 3～4・6区内ベルト1層	②<0.8>	外面回転ヘラ削り 内面回転ナデ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内面黄褐色7.5YR 8/6 外面橙色7.5YR 7/6～橙色5YR 6/8	丹塗り?
98	土師器	杯	SD17 3区1層(赤褐色層)	①<7.0> ②<0.8>	底部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A:微細～2mmの白色砂粒を含む B:良好 C:明赤褐色5YR 5/8	
99	土師器	小皿	SD17 5区2層	②<1.1>	内外面磨減により調整不明	A:微細な白色・黒色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内面浅黄褐色10YR 8/3 外面灰白色10YR 8/2	
100	土師器	皿?	SD17 3区1層(赤褐色層)	②<1.1> ③<10.0>	底部外面回転ヘラ削り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細～2mmの白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内面浅黄褐色10YR 8/3～橙色5YR 7/6 外面浅黄褐色7.5YR 8/4～橙色5YR 7/6	丹塗り?
101	土師器	杯	SD17 6区3層	②<1.7> ③<8.2>	底部外面磨減により調整不明 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色・茶色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内面灰褐色5YR 5/2 外面にぶい赤褐色5YR 5/4	
102	土師器	甕	SD17 5区1層(赤褐色)	②<2.7>	内外面ナデ	A:微細～4mmの砂粒・長石・雲母を含む B:良好 C:内面にぶい赤褐色5YR 5/4 外面にぶい橙色5YR 6/4	103と同一?
103	土師器	甕	SD17 4区(SD27)	②<4.5>	内外面ナデ	A:微細～4mmの礫を含む B:良好 C:内面にぶい赤褐色5YR 5/4 外面橙色5YR 6/6	口縁部内面端部煤付着 102と同一?
104	瓦	玉縁付丸瓦	SD17 3区1層(赤褐色層)	残存長7.0 残存横幅7.9	凹面布目圧痕あり	B:不良 C:灰白色10YR 8/1～褐色10YR 6/1	
105	瓦質土器	火鉢	SD18-7区北側(SD19)	②<7.5> ⑤<24.0>	体部外面中位～下位ハケメ 他はヨコナデ 体部外面1条の突帯貼付け	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内面灰色5YR 6/1 外面黄灰色2.5Y 4/1～黒色2.5Y 2/1	外面煤付着
106	土師器	椀	SD17 6区3層	②<2.1> ④<8.0>	外面回転ナデ 内面ナデ	A:微細な白色砂粒・長石を含む B:良好 C:内面にぶい黄褐色10YR 7/3～橙色5YR 7/6 外面灰白色10YR 8/2	
107	土師質土器	鉢?	SD19	②<5.7>	外面ヨコナデ 内面ハケ目 外面指頭圧痕あり	A:微細～2mmの白色砂粒・石英・長石・雲母を含む B:良好 C:内面橙色5YR 6/6 外面にぶい赤褐色5YR 5/3～暗赤褐色5YR 3/2	外面煤付着

第5表 第4次調査出土遺物観察表③

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)	形態・技法の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)〈残存値〉			
108	土師器	丸底杯	SD25	①14.7 ②3.2	内外面回転ナデ	A:微細～1mmの白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内面淡黄色2.5Y 8/3～灰白色2.5Y 7/1 外面淡黄色2.5Y 8/3	
109	土師器	甕	SD27-2	②〈2.9〉	内外面ナデ	A:2mm以下の赤褐色砂粒・5mm以下の石英を含む B:良好 C:にぶい橙色7.5YR 7/3	
110	土師器	椀	SP09	①(14.2) ②4.5 ④7.75	底部内面不定方向ナデ 口縁部内外面回転ナデ 底部内面指頭圧痕あり	A:2mm以下の白色砂粒・雲母・長石・6mmの小石を含む B:良好 C:灰白色10YR 8/1	
111	黒色土器	椀	SP09	②〈2.3〉 ④(8.0)	内面ミガキ 外面回転ナデ 高台部内面板状圧痕あり?	A:微細～2mmの白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内面黒褐色7.5YR 3/1 外面にぶい黄橙色10YR 7/3	黒色土器A類
112	黒色土器	椀	SP09	①(15.4) ②5.85 ④(8.3)	内面ミガキ 口縁部～体部外面回転ナデ 体部外面下位工具痕あり 底部内面指頭圧痕あり 高台部外面板状圧痕あり	A:微細～3mmの白色砂粒・雲母・長石を含む B:良好 C:内面黒色7.5YR 2/1 外面灰白色10YR 8/2	黒色土器A類
113	土師器	椀	SP17	①(15.0) ②〈2.4〉	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:にぶい黄橙色10YR 7/2～灰白色10YR 8/2	
114	土師器	不明	SX00	②〈2.8〉	内外面ナデ	A:微細な砂粒・雲母を含む B:良好 C:内面灰白色10YR 8/1～外面にぶい橙色10YR 7/3	
115	須恵器	壺?	カクラン14	②〈3.5〉 ③(5.8)	底部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A:微細～2mmの白色砂粒・長石を含む B:良好 C:内面灰白色2.5Y 7/1 外面黄灰色2.5Y 6/1	
116	磁器	猪口	カクラン14	①(5.4) ②3.75 ④2.6	内外面施釉 高台部端部露胎 高台部内面銘款あり	A:精良 B:良好 C:白色	波佐見焼
117	磁器	鉢	カクラン15	①(10.0) ②9.2 ③(7.0)		B:良好 C:乳白色	
118	ガラス製品	カップ	カクラン15	①9.3 ②8.95 ③6.8		B:良好 C:乳白色	底部に浮き文字と人型
119	石器	石鏃	遺構検出面	残存長2.35 幅1.3 厚さ0.4 重さ2g			安山岩

第6表 第6次調査出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)	形態・技法の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
				①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)〈残存値〉			
120	土師器	小皿	SD02-5区(東半)	②<1.1>	外面糸切り 底部内面不定方向ナデ 体部内外面回転ナデ	A：微細な白色・黒色砂粒・雲母を少し含む B：良好 C：にぶい褐色7.5YR 6/3	
121	土師器	小皿	SD01-4区	②<0.6>	外面糸切り 内面調整不明	A：微細～1mmの白色砂粒を少し含む B：良好 C：内面浅黄橙色10YR 8/3 外面褐灰色7.5YR 4/1	
122	瓦質土器	播鉢	SD04-2～3区間 ベルト1層	②<4.4>	外面注ぎ口指オサエ 内面播り目あり	A：微細～1mmの白色砂粒を含む B：やや軟質 C：内面褐灰色7.5YR 4/1 外面灰褐色7.5YR 6/2	
123	石器	石鎌	SD07-1底面直上	残存長2.1 最大幅1.2 厚さ0.35			黒曜石製
124	須恵器	杯身	SD10-2上層	②<1.6>	外面回転ナデ 内面調整不明	A：微細～2mmの白色・褐色砂粒を含む B：やや良好 C：灰色5Y 5/1	
125	土師器	杯	SD10-5	①(11.8) ②1.95 ③(8.0)	底部外面糸切り 他は回転ナデ	A：微細～2mmの白色砂粒を含む B：良好 C：内面黒褐色10YR 2/1 外面浅黄橙色10YR 8/3	
126	土師器	杯?	SD10-3	②<1.7>	内外面回転ナデ	A：1mmの白色・黒色砂粒を含む B：良好 C：にぶい橙色7.5YR 6/4	
127	土師器	丸底杯	SD10-7	②<3.0>	外面回転ナデ 内面磨滅により調整不明	A：微細～2mmの白色・黒色砂粒を含む B：良好 C：にぶい橙色7.5YR 7/4	
128	黒色土器	椀	SD10-4～5区間 ベルト1層	②<1.4>	外面回転ナデ 内面ミガキ	A：1mmの黒色砂粒を含む B：やや良好 C：内面褐灰色10YR 6/1～黒褐色10YR 3/1 外面浅黄橙色10YR 8/3	黒色土器A類
129	土師器	甕	SD10-4	②<1.65>	内外面回転ナデ?	A：微細～3mmの白色砂粒・長石を含む B：良好 C：にぶい黄橙色10YR6/4	
130	黒色土器	椀	SD10-10	②<1.55> ③(8.0)	外面回転ナデ 内面ミガキ	A：微細～3mmの白色砂粒を含む B：良好 C：内面黒褐色10YR 2/1 外面浅黄橙色10YR 8/3	黒色土器A類
131	黒色土器	椀	SD11-2	②<1.9>	高台部内面不定方向ナデ 底部外面回転ナデ 内面指頭圧痕あり	A：微細～1mmの砂粒を含む B：良好 C：内面黒褐色5YR2/1 外面橙色5YR6/6	黒色土器A類
132	白磁	椀	SD11-6	①(17.2) ②<6.3>	内外面施釉 口縁部釉カキ取り 外面回転ヘラ削り	A：精良 B：良好 C：釉灰緑色胎土灰白色N8/ 露胎灰黄色2.5Y 7/2	白磁碗Ⅷ類2aか
133	土師質土器	播鉢	SD14-1	②<3.5>	体部内外面ナデ 口縁部ヨコナデ 外面指頭圧痕あり 内面播り目あり	A：微細な白色・赤色砂粒・雲母を含む B：良好 C：橙色7.5YR 7/6	口縁部煤付着
134	土製品	不明	SD18-2	残存長(2.5) 最大幅(1.6) 厚さ0.35	花文スタンプあり	A：微細な砂粒を含む B：良好 C：灰白色10YR 8/2	
135	磁器	椀	SX02-3	②<2.4>	内外面施釉 外面草花文	A：精良 B：良好 C：釉灰白色2.5GY 8/1 胎土灰白色N8/	
136	磁器	皿	SX02-2	②<1.9> ④(4.3)	内外面施釉 内面中央と高台部内面砂目	A：精良 B：良好 C：釉明緑灰色7.5GY 7/1～緑灰色10G 5/1 胎土灰白色N9/	
137	土師器	杯	SP376	①(13.8) ②<3.2> ③8.25	底部外面糸切り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A：微細～2mmの白色砂粒を含む B：良好 C：にぶい黄橙色10YR 7/3	体部内外面下位煤付着
138	須恵器	杯身	表採 (ライオンズ側)	①(12.4) ④4.05	底部外面回転ヘラ削り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A：微細な白色砂粒・長石を含む B：良好 C：内面灰色N5/ 外面灰オリーブ色5Y 6/2～暗灰黄色2.5Y 5/2	内面自然釉 外面降灰
139	須恵器	高杯	表採	①(11.2) ②<3.05>	内外面回転ナデ 体部外面中位の2条の沈線間に波状文を施す	A：微細な白色・黒色砂粒を含む B：良好 C：内面灰色5Y 6/1 外面黄灰色2.5Y 5/1	内外面降灰
140	須恵器	高杯	表採 (ライオンズ側)	②<5.4>	脚部外面回転ナデ 杯部内面調整不明 3方向透かし 内面降灰	A：微細～2mmの白色砂粒を含む B：良好 C：灰色N6/～黄灰色2.5Y 4/1	
141	須恵器	甕	表採	②<7.1>	肩部内面同心円文当て具痕 頸部内面回転ナデ 頸部外面カキ目	A：微細～2mmの白色砂粒を含む B：良好 C：内面灰色N6/ 外面オリーブ灰色2.5GY 6/1	
142	石器	石鎌	検出面(中央部)	残存長2.2 最大幅1.7 厚さ0.35			黒曜石製

IV. まとめ

1. 古代～近世にかけての土地利用について

ここで、今回報告の調査成果を基に、御供田遺跡のJR鹿児島本線東側部分の土地利用についてまとめておく。

縄文時代については、第4～6次調査で石鏃が出土し、狩猟活動が行われる場であった。弥生～古墳時代の遺構・遺物はほぼ皆無であり、この時期は原野であったのであろう。奈良時代になると、8世紀後半の遺物が増えるが、御供田遺跡内では明確な遺構はない。

平安時代になると、第4次調査SP09出土の土師器・黒色土器は10世紀末頃のもので、中世集落の端緒と考えられる。このピットを囲むように、第4次調査SD06・10・17があり、10世紀頃に開削され最終的な埋没は11世紀後半～12世紀前半ごろで、各調査地でもこの時期の遺構が増える。また、第4次調査SD06・10・17と平行するSD02～05・18は10～12世紀前半に幾度も掘り返し掘られた一連の溝で、第6次調査SD10・11に連続するとみられることから、溝の最終的な埋没は14世紀ごろと考えられる。この時期の集落としては、第6次調査SP376が13世紀末～14世紀中頃と考えられ、10世紀末～14世紀にかけての集落が存在すると考えられる。ただし、集落内の建物は第1次調査地で複数の建物が確認されているが、他の調査地では明らかではない。また、井戸については第3次調査SX05のような袋状堅穴土坑が該当するのではないかと考えられ、第6次調査でもこうした土坑が確認されている。

第4次調査SD06・10・17と第6次調査SD10・11は、総延長約70mを確認し、なお溝は東側にのびている。この溝の機能は集落を囲むものと考えられるが、その起源としては条里地割を踏襲したものと考えられる。日野尚志氏^(註5)の研究によれば、調査地の南側でN-39°-Wの条里地割が確認されており、小字にも「丁ノ坪」が見える。第4・6次調査の一連の溝は、第4次調査SD10・17はN-40°-Wの方向をとっており、条里地割にほぼあっている。水城以北の条里地割については7世紀後半以降に施行されたと考えられており、8世紀後半の須恵器が御供田遺跡内で散見されることは奈良時代に条里水田が広がっていた可能性を示唆するものと考えられる。

こうした条里地割に規定される溝と方向を違える第4次調査SD14・15や第6次調査SD04・14は14～16世紀ごろと時期が下るようである。この時期の文献資料には『光明寺寺領注文案』明応8年(1499)正月24日に「白木原一所八段」と見える^(註6)が、まとまった遺構・遺物の確認はできない。10世紀に始まった中世白木原村がどのように継続し、後原遺跡を中心とする近世白木原村にどのように変遷するのかは今後周辺の調査に委ねたい。

2. 米軍板付基地に係わる遺物について

第3・4次調査地からは、昭和20～30年代の遺物が出土した。その中には戦時中に日本で作られ

た統制磁器も含まれるが、それよりも目立つのが米軍に由来すると考えられる遺物である。特に第3次調査 SE01出土マグカップやウイスキーボトルなどは、昭和30年代に米軍基地春日原住宅地区に近在する米軍ハウスで使われた品々がどのようなものであったかを見せてくれる。近現代の遺跡は埋蔵文化財の調査対象となりにくいものであるが、御供田遺跡のような地域における調査は現代史を考える上で重要な資料を提供してくれる。今後周辺の調査においても、中近世白木原村の変遷とともに重要な調査項目となるであろう。

註5 日野尚志1976「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」『佐賀大学教育学部研究論文集』第24集

註6 大野城市1990『大野城市史 民俗編』大野城市市史編纂委員会



第28図 御供田遺跡第1～6次調査遺構配置図 (S=1/1,500)

圖 版



(1) 御供田遺跡第3次調査地全景 (南東から)



(2) 御供田遺跡第3次調査地全景 (上空から)

図版2



(1) 第3次 SD03 (東から)



(2) 第3次 SX02 (東から)



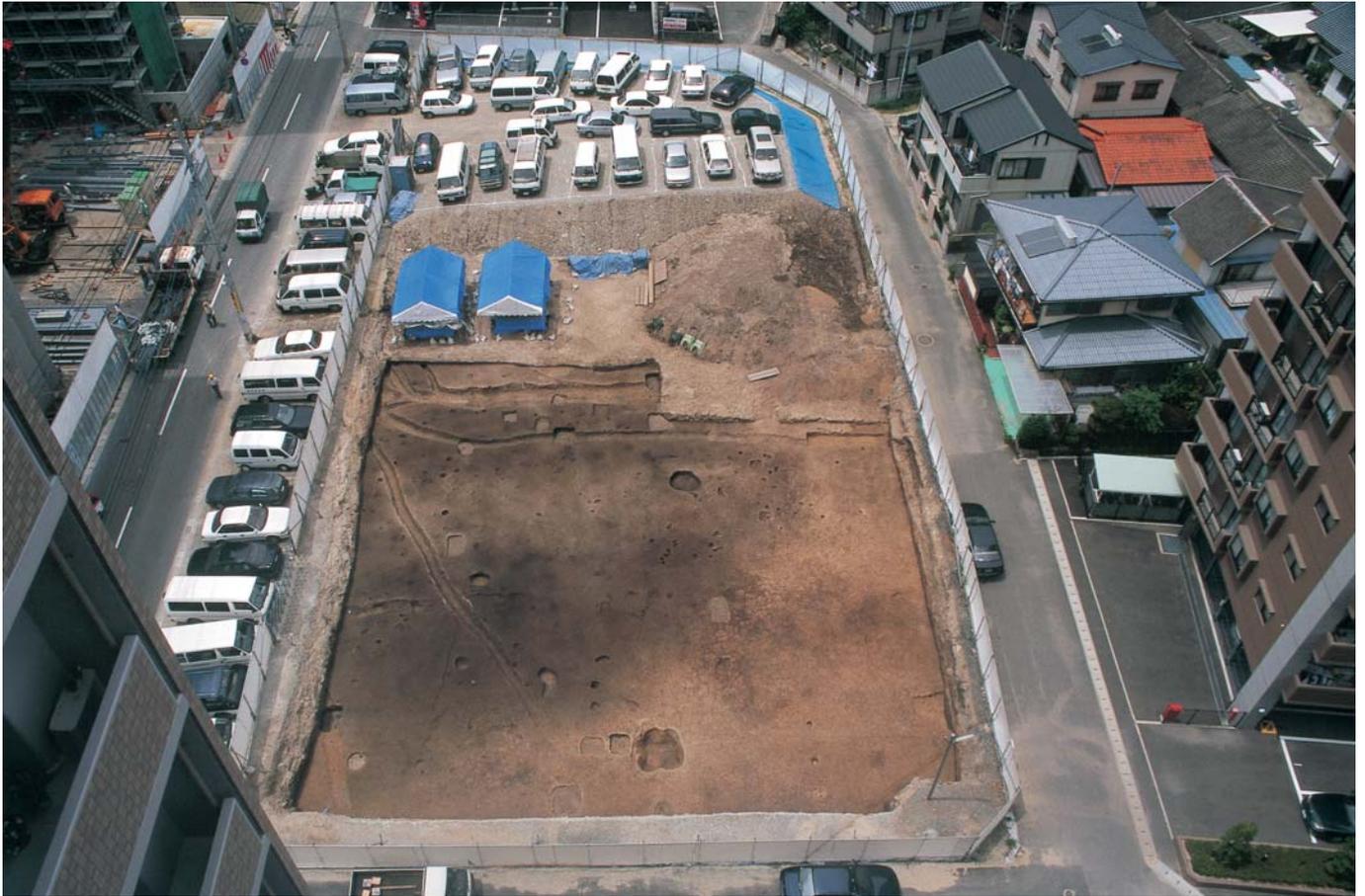
(3) 第3次 SX05 (上から)



(1) 御供田遺跡第4次調査地北半部全景① (南東から)



(2) 御供田遺跡第4次調査地北半部全景② (南東から)



(1) 御供田遺跡第4次調査地南半部全景① (南東から)



(2) 御供田遺跡第4次調査地南半部全景② (南東から)



(1) 御供田遺跡第4次調査地中央部全景① (南東から)



(2) 御供田遺跡第4次調査地中央部全景② (南東から)

図版6



(1) 第4次 SD01全景
(西から)



(2) 第4次 SD01a 土層 (南西から)



(3) 第4次 SD01d 土層 (南西から)



(1) 第4次 SD06土層 (南西から)



(2) 第4次 SD06①土層 (南西から)



(3) 第4次 SD08全景 (西から)



(4) 第4次 SD09全景 (北西から)



(5) 第4次 SD10全景 (南東から)



(6) 第4次 SD10①土層 (南西から)



(7) 第4次 SD10②土層 (南西から)



(8) 第4次 SD10③土層 (南西から)

図版8



(1) 第4次 SD15全景 (北西から)



(2) 第4次 SD15土層 (北西から)



(3) 第4次 SD16土層 (南西から)



(4) 第4次 SD17全景 (南東から)



(5) 第4次 SD17-1・2区間土層 (南東から)



(6) 第4次 SD17-2・3区間土層 (南東から)



(7) 第4次 SD17-3・4区間土層 (北西から)



(8) 第4次 SD17-7・8区間土層 (南西から)



(1) 第4次 SD18-2・3区間土層 (北東から)



(2) 第4次 SD18-3・4区間土層 (北東から)



(3) 第4次 SD18-4・5区間土層 (北東から)



(4) 第4次 SD18-5・6区間土層 (北東から)



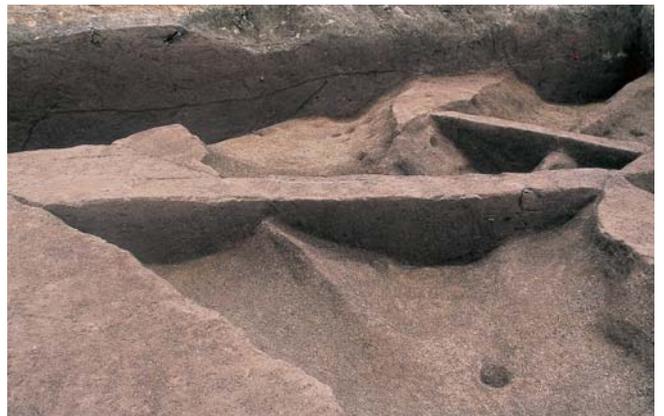
(5) 第4次 SD18-6・7区間土層 (北東から)



(6) 第4次 SD18-7・8区間土層 (北東から)



(7) 第4次 SD19・24土層 (南東から)



(8) 第4次 SD19・22土層 (南東から)



(1) 第4次 SP09遺物埋納状況 (南西から)



(2) 第4次 SP09遺物検出状況 (南西から)



(3) 第4次 SP09検出状況 (南東から)



(1) 第4次 SX01全景 (南西から)



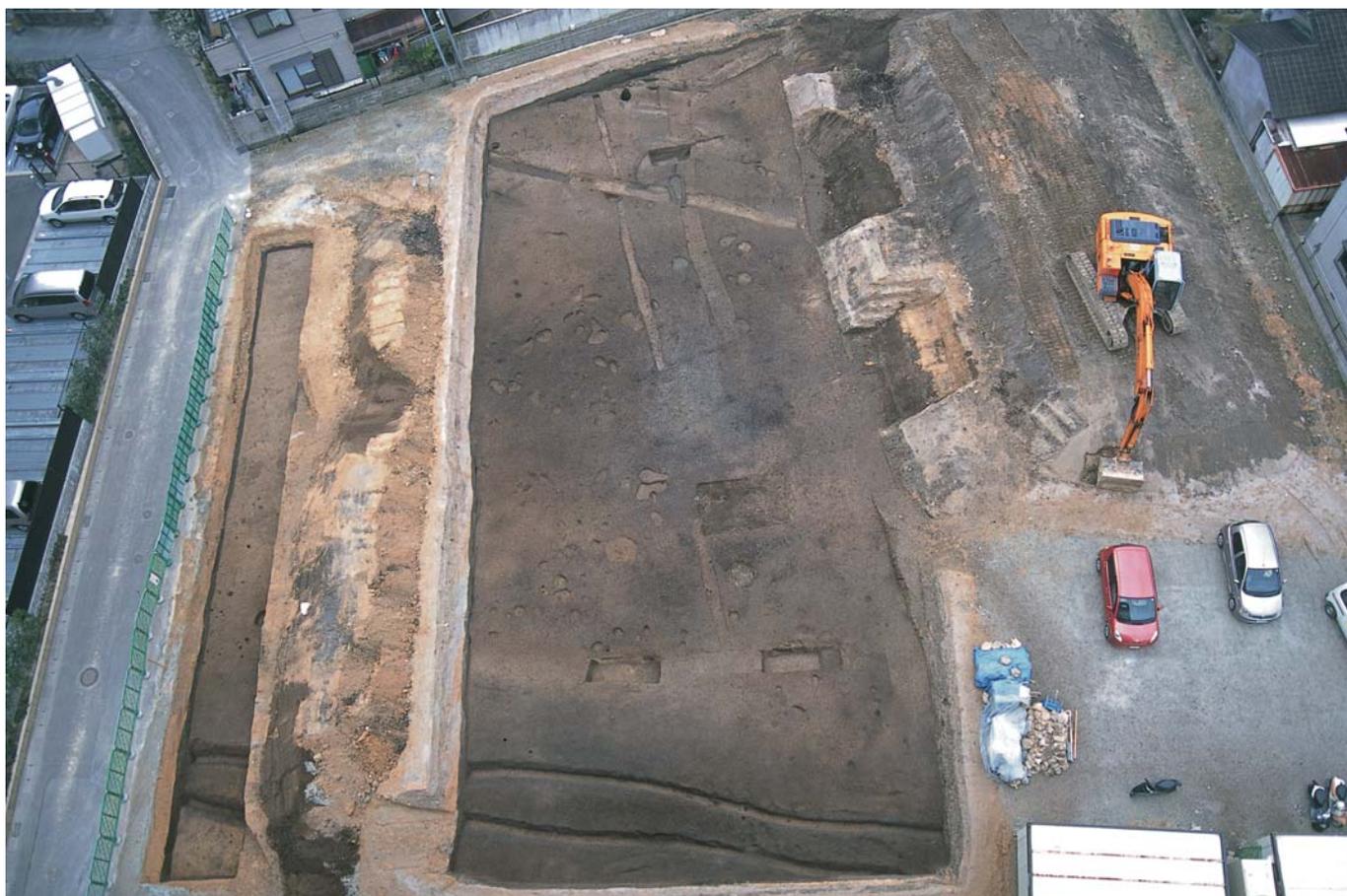
(2) 第4次 SX01土層 (南西から)



(1) 御供田遺跡第6次調査地調査前全景（北から）



(2) 御供田遺跡第6次調査地東半部全景（上空から）



(1) 御供田遺跡第6次調査地西半部全景① (南東から)



(2) 御供田遺跡第6次調査地西半部全景② (北東から)

図版14



(1) 第6次 SD01全景 (南東から)



(2) 第6次 SD04・05東半部全景 (南西から)



(3) 第6次 SD07~10東半部全景 (南西から)



(1) 第6次 SD10・11西半部
全景（北東から）

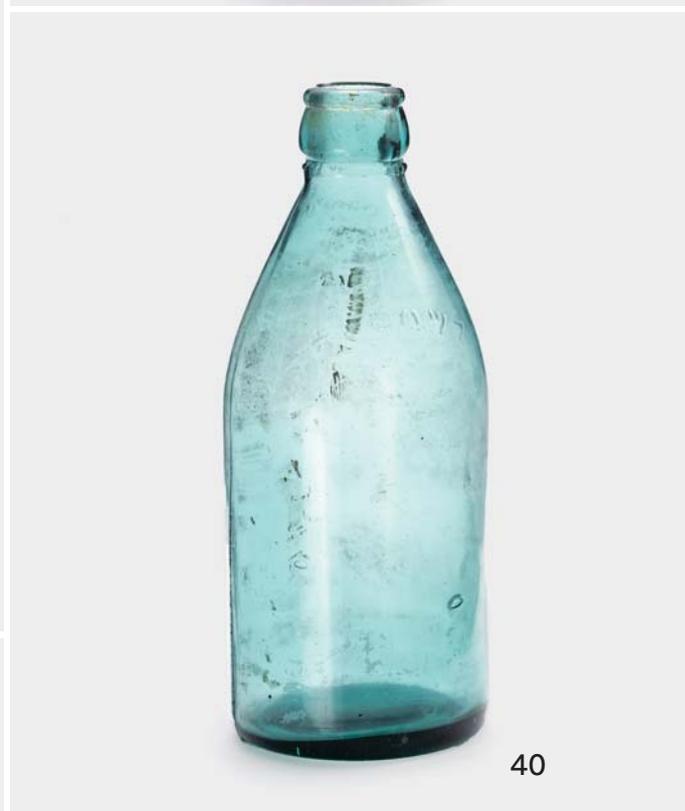


(2) 第6次 SP376遺物出土
状況（南東から）



(3) 第6次 SX02検出状況
（北西から）

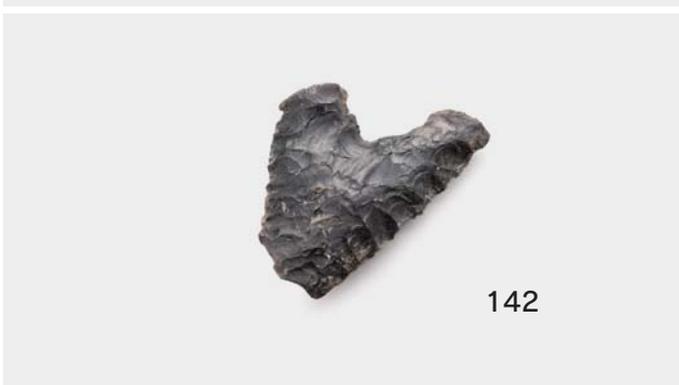
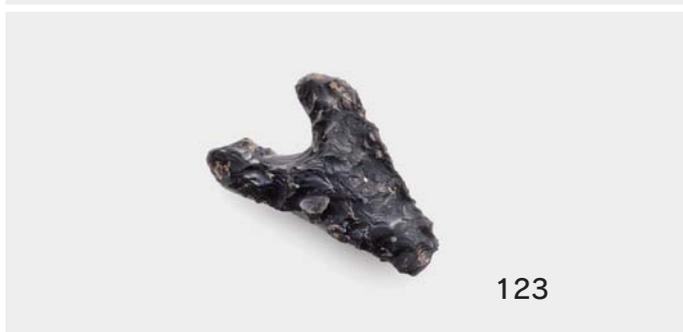














現在の御供田遺跡第3・4次調査地（左側マンションが第3次、中央マンションが第4次調査地）

報告書抄録

ふりがな	ごくでんいせき							
書名	御供田遺跡5							
副書名	第3・4・6次調査							
巻次								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第190集							
編著者名	石木 秀啓							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1							
発行年月日	2021年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
御供田遺跡 第3次調査	福岡県大野城市 白木原1丁目312-2	402192		33° 31' 34"	130° 28' 45"	1998/7/13 ~9/1	2656.27㎡ のうち 1393.66㎡	集合住宅建設
御供田遺跡 第4次調査	福岡県大野城市 白木原1丁目312-1	402192		33° 31' 35"	130° 28' 46"	1999/4/5 ~8/10	2207.94㎡	集合住宅建設
御供田遺跡 第6次調査	福岡県大野城市 白木原1丁目309-1他	402192		33° 31' 36"	130° 28' 47"	2006/12/13 ~ 2007/3/15	1600㎡	集合住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
御供田遺跡 第3次調査	集落等	平安時代、 昭和時代	溝 土坑 ピット カクラン	須恵器・土師器・ 黒色土器・瓦質 土器・陶磁器・ ガラス製品		平安時代の溝・土坑が確認された。カクランとした土坑からは、統制磁器や米軍が持ち込んだウイスキーボトルが出土した。		
御供田遺跡 第4次調査	集落等	平安～鎌倉時代、 昭和時代	溝 土坑 ピット カクラン	須恵器・土師器・ 黒色土器・瓦質 土器・陶磁器・ ガラス製品		平安時代～鎌倉時代にかけての溝や土坑、ピットが確認された。カクランとした土坑からは、太平洋戦争後の米軍の遺物が出土した。		
御供田遺跡 第6次調査	集落等	平安～鎌倉時代	溝 土坑 ピット カクラン	須恵器・土師器・ 黒色土器・瓦質 土器・陶磁器・ ガラス製品・石器		平安時代～鎌倉時代にかけての溝や土坑、ピットが確認された。		
要約	<p>平安時代～鎌倉時代の溝やピットが確認され、中世の白木原村と考えられた。溝は集落を囲むように巡らされ、条里地割を起源にしたものと考えられる。近隣に「丁の坪」の地名があることも参考となる。中世白木原村の姿が明らかになり、近世白木原村にどのように変遷するのか、今後の課題となった。</p> <p>第3・4次調査地からは米軍に由来すると考えられる遺物が出土し、昭和20～30年代に調査地西側にあった米軍基地春日原住宅地区と関連するものと考えられた。基地に近在する現代の白木原で使われた品々の在り方を知ることができた。</p>							

大野城市文化財調査報告書第190集

御供田遺跡5

令和3年3月31日

発行 大野城市教育委員会
〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 九州コンピュータ印刷
〒815-0035 福岡市南区向野1丁目19番1号